般若寺跡 Ⅱ

大宰府史跡　昭和62年度発掘調査概報別冊

昭和63年3月

九州歴史資料館

般若寺跡 Ⅱ

大宰府史跡　昭和62年度発掘調査概報別冊

昭和63年3月

九州歴史資料館

例　言

1．本書は九州歴史資料館が昭和61年９月８日～27日、同年12月15日～昭和62年２月10日に実施した福岡県太宰府市大字南字般若寺所在の般若寺跡の第３・４次発掘調査報告書である。

2．発掘調査は住宅建築にともなう事前の緊急調査で、九州歴史資料館調査課高倉洋彰が調査を担当した。調査の実際には調査課の石松好雄課長をはじめ、横田賢次郎・森田勉・赤司善彦各氏、および山本信夫氏をはじめ太宰府市教育委員会のご協力を得た。

3．発掘調査の結果について、大宰府史跡調査研究指導委員会の諸先生にご指導を得た。

4．発掘調査の基準点は国土調査法の第Ⅱ座標系の数値を用いている。

5．遺構の実測は高倉・横田・赤司、遺物の実測は石松・高倉が行なった。製図・拓影の作成は石松・高倉、遺構・遺物の写真撮影は学芸一課石丸洋による。また遺物の整理・復原には田崎道子・小西恵子・太田千賀子の協力を得た。

6．本書の執筆はⅣ－(4)を石松が行ない、他の部分および編集は高倉が行なった。

目　次

Ⅰ　調査にいたる経過……1

Ⅱ　調査の概要……3

Ⅲ　検出の遺構……5

Ⅳ　出土遺物……11

(1)　各遺構出土の土器……11

(2)　第3次調査暗茶色土層出土土器……13

(3)　第4次調査層位出土土器……15

(4)　瓦類……20

(5)　金属器……24

Ⅴ　調査の成果……25

挿図目次

第1図　般若寺跡周辺古代寺院分布図……2
第2図　般若寺跡トレンチ配置図……3
第3図　般若寺跡第2～4次発掘調査区遺構配置図……6
第4図　塔ＳＢ001遺構実測図……折り込み
第5図　掘立柱建物ＳＢ010遺構実測図……折り込み
第6図　各遺構出土土器実測図……12
第7図　第3次調査　暗茶色土層出土土器実測図……14
第8図　第4次調査　暗褐色土層・暗茶色土層出土土器実測図……17
第9図　第4次調査　暗茶褐色土層出土土器実測図……19
第10図　軒丸瓦拓影・実測図……20
第11図　軒平瓦拓影・実測図……21
第12図　道具瓦拓影・実測図……22
第13図　丸瓦拓影・実測図……22
第14図　丸瓦粘土紐痕跡拓影・実測図……22
第15図　平瓦拓影・実測図……23
第16図　青銅製風招・鉄釘類実測図……24

図版目次

図版1　般若寺跡周辺航空写真
図版2　昭和54年第2次調査検出の塔ＳＢ001基壇と塔心礎
図版3　（上）　第3次調査　南トレンチ
　　（下）　第3次調査　南トレンチ西端検出のSB001瓦積み基壇掘込地業
図版4　（上）　第3次調査　東トレンチ
　　（下）　第3次調査　北トレンチ
図版5　（上）　第4次調査　塔ＳＢ001基壇の全景
　　（下）　第4次調査区の全景
図版6　ＳＢ001瓦積み基壇近景
図版7　（上）　ＳＢ001瓦積み基壇の基壇化粧
　　（下）　基壇外の瓦の散乱状態

図版８　（上）　ＳＢ001基壇北辺部中央付近の瓦積みの状態
（下）　ＳＢ001基壇北東隅の瓦積みの状態
図版９　（上）　ＳＢ001基壇の版築と旧土壇の状態
（下）　塔基壇（土壇）の旧景観
図版10　掘立柱建物ＳＢ010
図版11　ＳＢ010柱掘形
図版12　第３次調査　暗茶色土層・ＳＫ014出土土器
図版13　第４次調査　ＳＢ010柱穴・ＳＫ016・ＳＸ017、暗褐色土層、暗茶色土層出土土器
図版14　第４次調査　暗茶褐色土層出土土器
図版15　出土軒丸・軒平瓦
図版16　出土丸瓦・丸瓦粘土紐痕跡・道具瓦
図版17　出土平瓦
図版18　（上）　青銅製風招
（下）　鉄釘

Ⅰ　調査にいたる経過

大宰府政庁の前面に、北東から西鉄二日市駅の付近に向かって伸びてくる丘陵がある。頂部に立つと政庁・観世音寺をはじめ、大野城・水城・基肄城で囲まれた大宰府都城を一望できる絶好の地で、頂部から裾部にかけての地名が般若寺であること、塔心礎が残ることなどから般若寺跡と称されていた。昭和54年、塔心礎の西側に住宅が建築されることになり、その事前調査としてはじめて発掘調査を実施したところ、塔跡と判断できる瓦積み基壇を検出でき、寺跡であることが確認できた。[1]

昭和54年の第２次調査では調査区の東隣り、塔心礎の北・東部、すなわち太宰府市大字南字般若寺９－33～35・52番地の地には農林漁業金融公庫の二日市職員社宅があり、したがって基壇の北・東部の調査は十分でなかった。ところが昭和61年にいたり社宅が解体・転売され住宅が建築されることとなった。塔跡として一帯を保存すべく関係機関と努力を重ねたが、その実行は困難で、結局発掘調査を実施することとなった。

調査地点は解体された農林漁業金融公庫二日市職員社宅が鉄筋コンクリート２階建てだったためその基礎が深く、その上解体時に重機で荒掘りされ遺構の残存が危ぶまれた。そこで調査は、住宅建築予定地にトレンチを入れて遺構の残存度を確認し、その結果にもとずいて必要であれば精査を実施することにした。まず、昭和61年９月８日から27日までの３週間をかけて第３次調査としてトレンチ調査を実施した。その結果、調査地点の住宅建築・重機による損壊が遺構面に及んでいないこと、東半部には顕著な遺構が存在しないことから、西半部について精査することとし、第４次調査を昭和61年12月15日から昭和62年２月10日にかけて実施した。

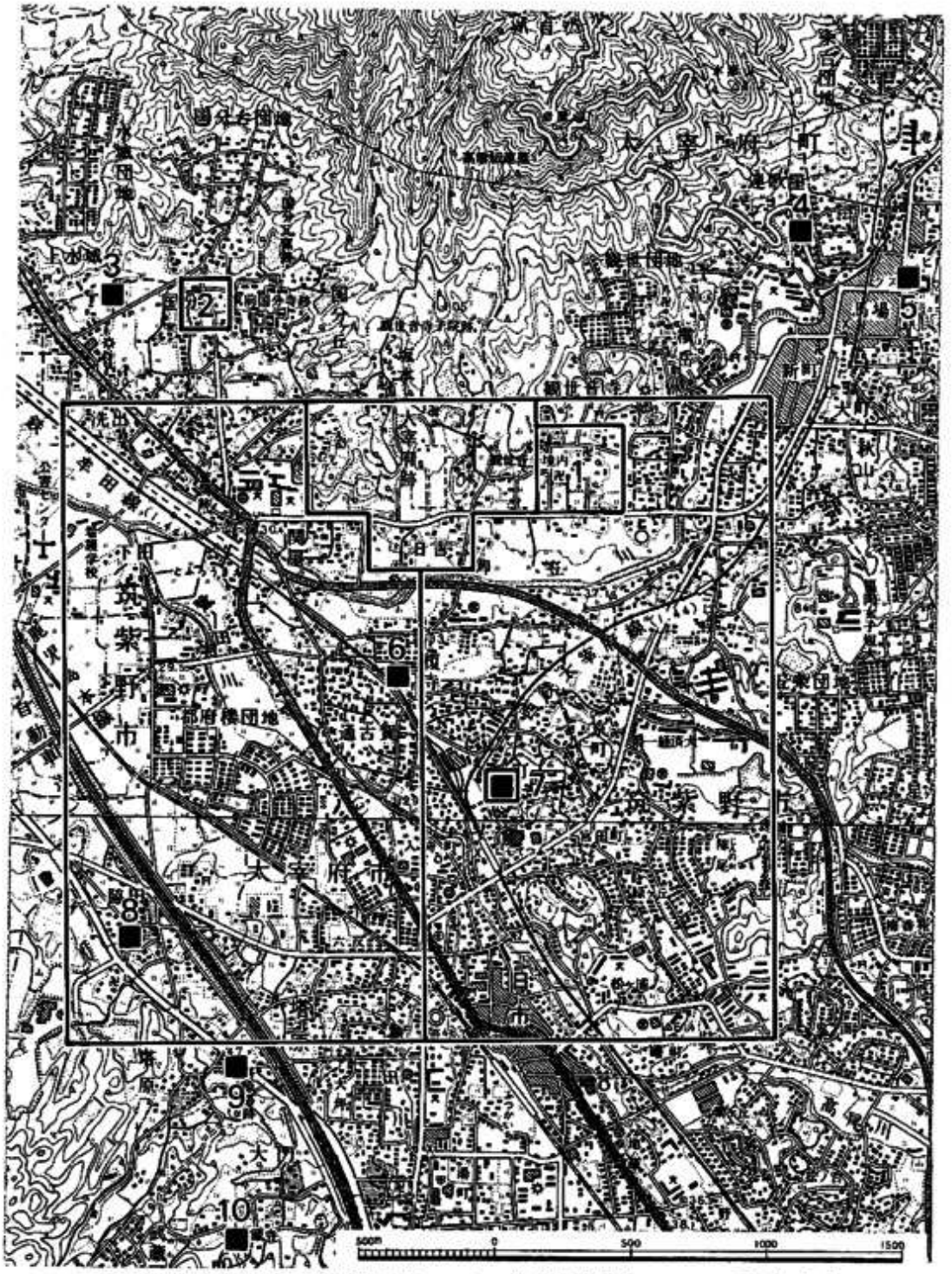
太宰府市から筑紫野市におよぶ大宰府条坊推定地の内外は、古代の九州における政治の中心であった大宰府の膝下にあたる。宗教的にも中心的な位置を占めるだけに、第１図に示すように古代寺院の数も多い。それらについてはすでに概報[1]で略述しているが、多くが条坊外に建立されているのに対し、奈良時代に定額寺に列せられた般若寺[2]は府大寺観世音寺とともに条坊内にみられる点、重視されるものがある。周囲に市街化がおよんでいるが、解明をいそがれている寺である。

註

（１）　高倉洋彰・高橋　章『般若寺跡』（大宰府史跡昭和54年度発掘調査概報別冊）1980

なお、昭和51年に重要文化財般若寺七重石塔の解体修理にともない、周辺の調査を実施している（財団法人文化財建造物保存技術協会『重要文化財七重塔修理工事報告書』1977）。これを第１次調査としている。

（２）　「上宮聖徳法王帝説」裏書。竹内理三編『寧楽遺物』下、文学編人々伝。



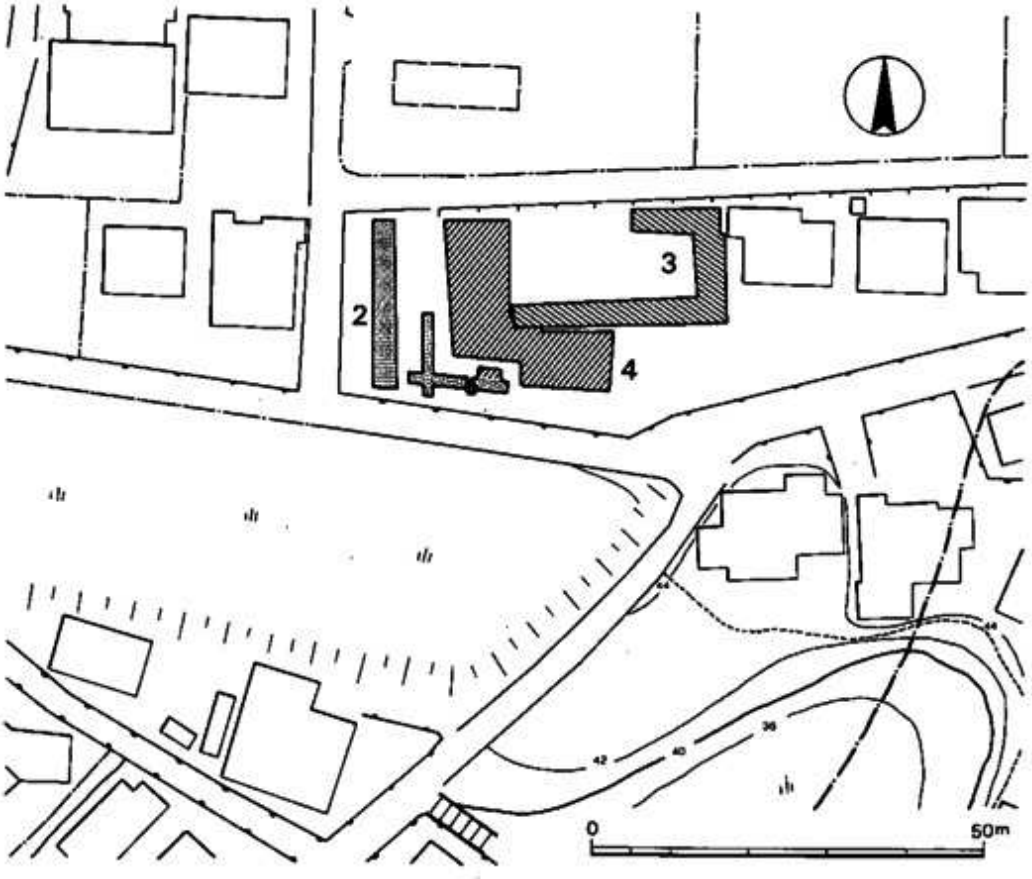
1．観世音寺　2．筑前国分寺　3．筑前国分尼寺　4．原山無量寺
5．安楽寺　6．浄妙寺（榎寺）　7．般若寺　8．杉塚廃寺
9．塔原廃寺　10．武蔵寺
（ほかに観世音寺北方大野山上に四王寺、安楽寺東北方宝満山西麓に惠門山寺がある）

第1図　般若寺跡周辺古代寺院分布図

II　調査の概要

調査対象地は第２次調査地点の東に接する宅地約1,000㎡である。丘陵頂部の平坦面の南端近くにあり、塔心礎の残る市有地の北および東に相当する。

第３次調査は昭和61年９月８日に着手した。塔跡の東部に回廊などの遺構が見込まれたことから、旧建物（農林漁業金融公庫二日市職員社宅）の外側に沿って、調査区の南部（３ｍ×28ｍ）・北東部（３ｍ×11ｍ）に２条の東西トレンチ（試掘溝）を設定した。旧社宅解体後の破砕されたコンクリートブロックを含む撹乱土を重機で除去した後に発掘作業にはいったが、南トレンチの西端近くにおびただしい量の瓦が散乱していた。瓦は10cmほどの間層をはさんで二層に分かれるが、上層にくらべて下層のそれは小片が多い。また、南西隅で塔基壇の掘込地業とみなされる遺構を検出した。これに対し、北東トレンチにはほとんど遺構は残されていなかった。ただ両トレンチでは遺構面に約0.4ｍの高低差があり、そこで東端部に４ｍ×８ｍの南北ト



第２図　般若寺跡トレンチ配置図

レンチを設けた。トレンチをコ字形に配したことになる。雨天に悩まされつつ18～24日に写真撮影・実測を終え、補足調査を経て、9月27日には原状に埋め戻し調査を終了した。

第3次調査の結果、遺構面には旧社宅による破壊が及んでいないこと、調査区の西半に遺構が遺存することが判明した。そこで、調査区の西半部を中心に第4次調査を実施した。

第4次調査は昭和61年12月15日に着手した。重機で整地土を除去した後、表土・旧表土（暗褐色土層）の順で堆積土を取り除いたが、この間旧建物の基礎ブロックに悩まされた。暗褐色土層の下にある暗茶色土層が遺構面を覆うが、24日にこの面にいたった。調査区西南部で塔の瓦積み基壇と、その外周部に散乱する多量の瓦片を検出した。正月明けの7日に外周の瓦を検出・清掃の後、写真撮影など記録を作成し、瓦を除去する。こうして8日には塔瓦積み基壇東北隅をほぼ検出した。その後、塔周辺の遺構検出作業を続行し、19日までに一応の調査を終え、20日から24日まで写真撮影・実測などの記録を作成した。

1月26日から塔基壇掘込地業の確認、基壇の版築状態の調査、下層遺構の調査などのため、補足調査を開始した。その結果、塔基壇の東側で、塔に先行する巨大な掘形をもつ掘立柱建物を検出した。たまたま大雪に遭い、調査に支障をきたしたが、2月4日に作業を終えた。5日から写真撮影・実測・柱掘形の断ち割り、土層剝ぎ取りなどを行い、昭和62年2月10日をもっていっさいの調査を完了した。

なお、昭和62年3月に第3・4次調査区の北西約100mの、同じ丘陵上に位置する大字南字般若寺19－1番地ほかの地で住宅建築の申請が出され、太宰府市教育委員会によって大宰府条坊第63次調査（左郭十三条四坊）として発掘調査が実施されている。この調査では東西方向に並びN 1°45′Wに方位をとる掘立柱構の柱掘形が10個検出されている。この構は出土の遺物から奈良時代に属すると判断されている。位置・時期からみて、次に報告する般若寺（塔）あるいはその下層で検出した掘立柱建物と何らかの関連をもつと思われる。

Ⅲ　検出遺構

今回の調査では塔建物基壇１棟・掘立柱建物１棟・樋１条のほか、土壙・ピットなどを検出した。

層位

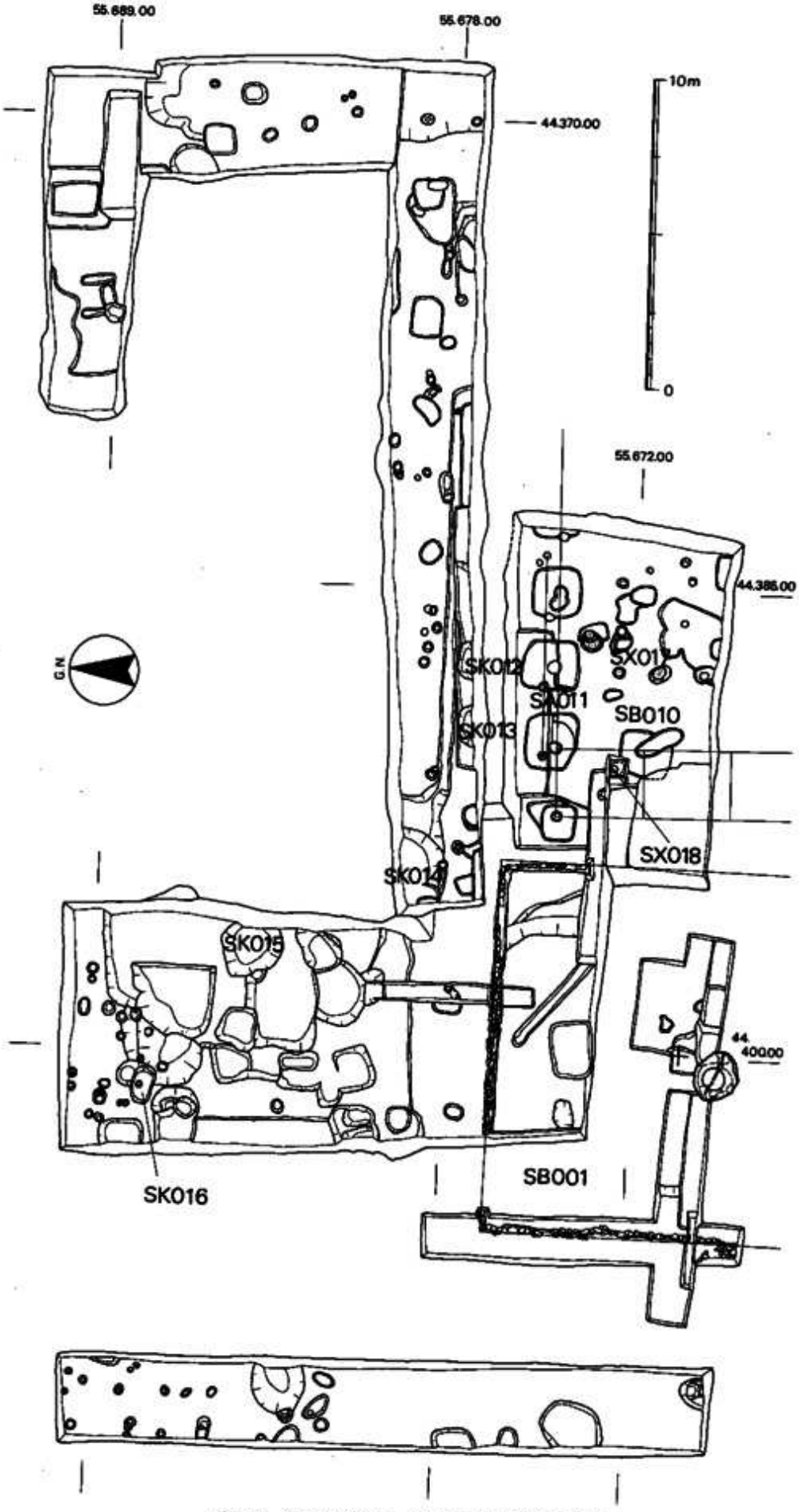
調査区の層位は第８次調査の南トレンチに代表される。第５図にその一部を示したが、調査区の全体を旧社宅解体後の薄い盛土（白色砂層①）と旧社宅建設のための土地造成にともなう盛土（黄褐色砂質土層②・暗灰褐色土層③）が約60cmの厚さに覆う。その下位の10～30cm前後の厚さの暗褐色土層④が旧表土（上面が昭和30年代までの地表）となる。この旧表土は塔基壇部分では周囲よりも約40cmほど高くなり、これが土壇状の旧景観（図版９－下）を呈していたと思われる。塔基壇の部分ではその直下に遺構があり、基壇化粧の外側には暗茶色土層⑤・淡赤茶色土層⑥が20～40cmほど堆積している。⑤は塔基壇に向かうにしたがって⑥との分離面に瓦の堆積が著るしくなる。⑥はほとんど瓦を含んでいないが、西端から東へ約３ｍにかけて下面にもう一面瓦堆積層がある。上下２面の瓦堆積層は約10cmの土層を挟んでいる。大片の多い上面にくらべて、下面の瓦は破片が小さい。⑥の下に一部であるが表面の固く締まった明茶色土層⑦がみられる。創建時の表面をなすと考えられる。⑤・⑥は塔建立後の堆積土であり、遺物は両者をあわせて暗茶色土層で取り上げている。

⑥層の下位は東半では地山である黄白色粘土であるが、西半では地山と⑥層との間に様々の土層がはいってくる。とくに地形が南へ傾斜していることから、この間層は南に向うにしたがって厚くなる。また北、つまり塔基壇の北方にも約60cmの厚さで土層が認められる。これは寺の創建にともなう土地造成時の堆積と考えられる。

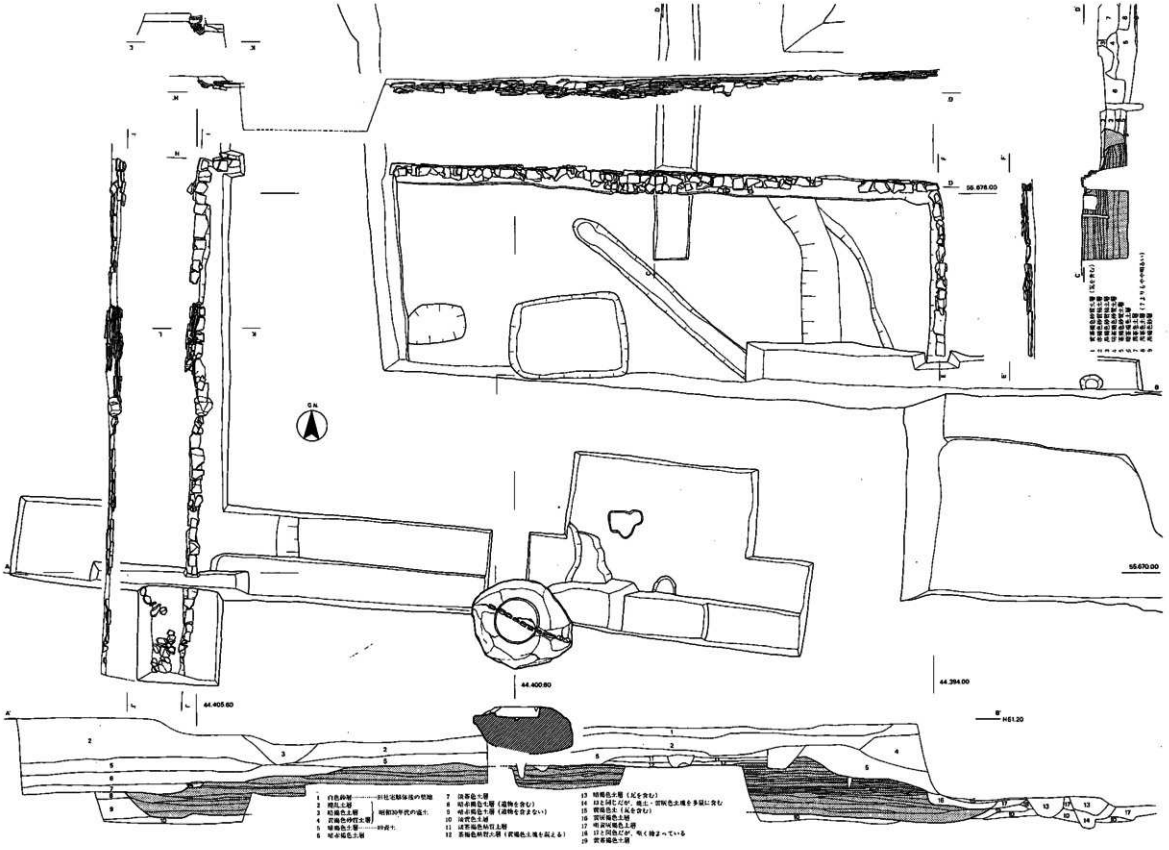
塔基壇の北方は旧農林漁業金融公庫二日市職員社宅の基礎工事およびその解体にともなう撹乱によって暗茶色土層、すなわち瓦積み基壇の基底面以下まで削平されていた。つまり残存面が基底以下であったので、整地土に窪むように堆積した完形軒丸瓦を含む多量の瓦と土器を暗茶褐色土層として取り上げた。この部分では暗茶色土層からも土器と多量の瓦が出土しており、この出土傾向からすると暗茶褐色土層は暗茶色土層下半、ないしは不整形に大きく広がる瓦溜りであったと思われる。

塔基壇の東側も暗茶褐色土層として掘り下げたが、ここでは明黄色～茶褐色系の明るい色調の平坦な土層がみられた。掘立柱建物ＳＢ010構築のための整地と思われる。なお、この部分では遺物の出土はほとんどなかった。

以下、主な遺構を報告する。



第３図　般若寺跡第２～４次発掘調査区遺構配置図



第4図　塔ＳＢ001遺構実測図

礎石建物（塔跡）（第４図、図版５～９）

ＳＢ001　昭和54年に実施した般若寺跡第２次調査で検出した瓦積み基壇建物で、この調査では基壇の北西隅を含む西辺部を検出し、東西幅14m以下、南北幅8.1m以上の規模のものであることを確認した。原位置を示すものではないが、基壇中央に塔心礎が据わっていることと、基壇の規模から考えて、これを塔跡と判断した。今回の調査は基壇規模の確定を目的としたが、次に述べるような成果を挙げている。

今回の調査では基壇の北東隅を含む一画を明らかにした。基壇化粧の瓦積みは北辺部で東端を含む東西約8.8m、東辺部で北端を含む南北約３ｍを検出した。東辺部は残存状態が良くなく、瓦積みが基底の１段、ないしは２・３段遺存するにとどまった。また調査区の南半分は旧農林漁業金融公庫二日市職員社宅付設の便槽によって破壊されていた。これに対し北辺部は一部を除いておおむね３～７段分が遺存していた。瓦積みの方法は両辺ともに同じで、基壇積土の一部を掘り下げ、その後に瓦を一列に積み上げ空隙に暗灰茶色土を充塡することを基本としている。これは第２次調査で確認した西辺部の瓦積み法と一致している。なお、三辺ともに階段の位置の確認には及ばなかった。

三辺の基壇化粧の瓦積みをみると北西隅付近がもっとも高く、南・東へと約20cmほど傾斜している。また三辺では、まず西辺に瓦積みがほどこされ、ついで北辺、さらに東辺の順に作られている。ことに北東隅では北辺部東端にくらべ東辺部北端の基底面が約８cm高くなっている。

基壇の積土は現存部の上面から約60cmまでは２～５cm前後の厚さの淡茶褐色系の粘質土や黄色粘土などを版築状に堅固に搗き固めている。その作業はていねいに行なわれており、各層は一枚毎に剝ぐことも可能であった。それより下層は淡褐色・黄灰色・茶褐色などの土を10cm前後の厚さで30～50cm積んでいる。この積土上下に大別される厚薄二層はほぼ水平になされている。比較的厚めの層位の部分がおおむね掘込地業に相当し、薄い互層の積土部に瓦積みで基壇化粧をほどこしているようであるが、前述のように基壇化粧は傾斜しているので整然と区別できるものではない。掘込地業は東・西辺部では瓦積み線の約1.0～1.1m外側から、北辺部では約0.5m前後外側からそれぞれ行なわれており、北辺部では約0.5mの深さに及んでいる。

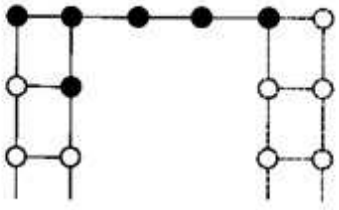
基壇積土は比較的軟かな暗褐色土層に覆われている。これが旧表土で調査区の全面に及ぶ。この旧表土は基壇の東西断面で明らかなように積土の両端の内側から傾斜している。昭和33年に小田富士雄氏が般若寺で土壇を撮影されている（図版９－下）。それに比較するとやや隆起が低いが、傍らに立つ樟樹の形状からみても、この基壇であることは疑いない。つまり般若寺の土壇の消失は削平ではなく、盛土によるものであり、これは他の遺構の遺存に希望を抱かせるものでもある。

基壇積土の上面は瓦積みの基底から約0.7m前後の高さをもつ。しかし、上面には塔心礎をはじめ礎石の位置を示す遺構はまったく認められなかった。

以上のように残存状態は必ずしも良好ではなかったが、ともあれ、2度の調査で基壇北辺部の両端が確認でき、その東西幅が11.9mであることが明らかとなった。これを平城宮跡で知られる小尺1尺＝29.6cmで除すると40.20尺となる。つまり、本基壇は一辺40尺、1尺＝29.75cmの単位尺を用いて構築されたと考えられる。一辺40尺あるいはその前後の基壇幅は各地の古代寺院の塔にみられる（後掲第2表）ところであり、これからこの基壇が塔のそれであると確定できる。第2表に示した類例からみて、基壇上には一辺20尺ほどの塔が建てられていたのであろう。

掘立柱建物（第5図、図版10・11）

ＳＢ010　塔基壇の東に接する位置で、1棟の掘立柱建物の一部を検出した。4間以上×2間以上の規模でN30°Eに方位をとっている。セクションでは塔との先後関係を知ることができなかったが、基壇東辺を化粧する瓦積みの最下段よりも約20cm下部で遺構を検出したこと、基壇の外側に散乱堆積した瓦群の下層に西側の柱掘形が位置することなどから、この掘立柱建物が塔に先行することは疑いない。



柱掘形は北側柱列の5個を含む6個を検出した（説明の便宜上柱掘形にＡ～Ｉの記号を付し、以下略称する）。いずれも大形で、中では小形の西北隅の掘形Ａにしても1.1～1.2m、深さ0.9mをはかり、他はその東に接する一辺1.7～1.8m、深さ1.7mのＢを含め1.5～1.8m、深さ1.4～1.6mの巨大なものであった。粘質土が互層をなす埋土は版築状に搗き固められていた。調査区壁にかかる東端のＥを除いて柱位置、柱痕跡は図版11でみられるように歴然としている。これから、Ｄのみは径31cmとやや小さいが、他は径35～38cmの太さの柱の使用を復原できる。Ｄ・Ｇには抜き取り痕がみられた。

それぞれの柱間間隔を第1表に示した。これらを塔で算出できた単位尺（1尺＝29.75cm）で除すると、整数値ないしはそれに近い数値を得ることはできない。いずれにしても、柱間間隔は等間にならないが、より近い整数値で除してみると30.65cm、30.94cmの二グループの数値が得られる。これを単位尺と仮定すると北側柱列は西から7尺、8.5尺、8尺、西側柱列は北側で9尺となる。こうしてみるとＳＢ010は1尺＝30.65～30.94cmを単位尺としているとみて誤りあるまい。とすれば、これは北魏尺（1尺＝30.9cm）に近い数値となる。

単位尺					柱間間隔
柱位置	心々距離(cm)	29.75cm	30.65cm	30.94cm	
A～B	216.5	7.28尺	7.06尺	7.00尺	7尺
B～C	260.5	8.76	8.50	8.42	8.5
C～D	245.2	8.24	8.00	7.93	8
B～G	278.5	9.36	9.09	9.00	9

第1表　柱間の間隔

第５図　掘立柱建物ＳＢ010遺構実測図

最後となったが、この建物の棟位についてふれておくことにする。柱・柱掘形の位置や規模、柱間間隔などからみて、この建物は東西棟、南北棟のいずれに復原するにせよ、西側に7尺の心々距離をはかる廂をもつことは疑えない。北側柱列はそれから8.5尺・8尺の間隔をもって東に延びEにいたる。Eは一辺のみが知られるが、その規模からみてB～Dに近く、これが廂掘形となることはなかろう。したがって、廂は西側のみにつくか、あるいは東西廂になるとすれば、さらに東に掘形を想定せざるをえないことになる。一方、南北方向についてはB・G間が9尺であることのみが知られ、Gの南にIがあろうが、それは調査区外に位置する。つまり調査区内に掘形がないことから、G・Iは掘形の端部で1.25m以上の間隔をもっている。これはBとGの掘形端部相互の間隔1.4mに近い。したがって南北方向の柱間間隔は9尺等間であろうと推測できる。このようにみると、SB010を左右対称の南北棟建物とした場合には梁行4間以上(4間の場合は片面廂で7尺+8.5尺+8尺+8.5尺、5間の場合は両面廂で7尺+8.5尺+8尺+8.5尺+7尺)×桁行2間以上（9尺等間）の建物であろうし、東西棟建物とした場合には西面に廂をもつ梁行3間（9尺等間)×桁行4間以上（7尺+8.5尺+8尺+……）の建物となる可能性が生ずる。検出遺構のみからはこれ以上限定できないが、柱・柱掘形の大きさや掘形埋土の厳重な地業などからみると、整然と企画された両面廂の梁行5間×桁行2間以上の南北棟である可能性が強いのではなかろうか。

ところで、発掘調査の途中、柱掘形Cの東・南辺、Bの南辺を結び、さらに北・西に延びるラインの内側に赤茶色（赤褐色）粘質土層のひろがりが認められた。この場合にも柱痕跡は明瞭に認められ、隅丸方形竪穴住居の床面と柱を思わせるものがあった。この土層の除去後に柱掘形を検出したのであるが、こうした情況は建物の造営後に何らかの意図をもって赤褐色粘質土を敷き詰めたと判断できる。それと同様の土層のひろがりは第3次調査南トレンチでも柱掘形Bの西辺の延長上から柱掘形Dの東辺延長上にかけて約6mの幅で認められた。この土層を除去したところ2個の隅丸方形土壙（SK012・013）を検出できたが、その内部はA～D・Gとまったく同様の方法で埋められていた。検出部分の形からみるといずれもSB010とは柱筋が通らないが、埋土の共通性は無視できず、これらは何らかの形でSB010に連なる施設と考えてよかろう。

柵

SA011　掘立柱建物SB010の北側柱の柱掘形上を東西に延びる柱穴群で、調査区内に対応する柱列を検出できなかったことから柵とした。掘形は径24～30cmの円形を呈し、2.1～2.2mの間隔をもって配されている。

土壙

SA015　塔基壇の北方、調査区東壁中央付近で検出した。一辺の長さ約1.8～2.0m、深さ0.4mほどの不整形な隅丸方形状の土壙で、壙内には多量の瓦や須恵器大甕片、それに須恵器・土

師器の小片が充満していた。塔基壇下底よりも約30cm位で掘り込み面を確認したが、上部に多量の瓦が堆積し、さらに須恵器大甕の同一個体片を暗茶色土層からも検出しているので、実際には上層に存在したと推定される瓦溜り（旧社宅基礎で撹乱）の下底の部分と考えられる。

ＳＫ016　塔基壇の北側は旧社宅の基礎工事によって著るしく破壊されていた。しかし北端付近はかろうじてそれを免かれ、平安時代に降る時期の小ピットが残存している。ＳＫ016はそれらと混在する土壙で、0.6×1.2m、深さ0.4mほどの大きさの隅丸長方形を呈していた。これらの土壙・ピットはＡトレンチで検出したピット群と関連するのであろう。

保土穴

ＳＸ018　掘立柱建物ＳＢ010の柱掘形Ｇの北西隅を覆うようにして、保土穴１基を検出した。ＳＢ010に後出することは疑いないが、塔基壇を化粧する瓦積みの基底面よりも約20cm深いことと、もっとも上面で確認された柱掘形Ｂ・Ｃとほぼ同じ面であることを考慮すると、この建物の構築されている面が生きている段階のものと判断できる。あるいはこの建物に関連するものかも知れない。ともあれ、この保土穴の存在によってＳＢ010の構築面が層位的にも塔の下層となることを確認できるのである。

保土穴は径22～28cm、深さ４cmほどの大きさで、摺鉢状の形態をなす。壁は４cm前後の厚さの部分が堅く焼き締まって赤化しており、さらにその周囲にも赤変が及んでいる。穴の内部には灰とともに鉄滓が残されていた。

不明遺構

ＳＸ017　掘立柱建物ＳＢ010の内部で検出された遺構で、１mほどの間隔をもつ３個のピットからなる。各ピットは南北の２個が径50cm～70cmほどの長円形であるのに対し、中央の１個は径40cmの円形をなす。深さも一定しておらず、配列・形状ともに不揃いであるが、いずれもが２・３cmほどの小石で充満されている。しかも各ピットから検出した須恵器片を接合すると、ほぼ完形の杯蓋（第６図４）となる。したがって、これらのピットは互いに関連していようが、性格を明らかにはできなかった。

Ⅳ　出土遺物

出土した遺物には土器・瓦類・金属器その他がある。瓦類がもっとも多く、塔基壇の周辺からまとまって出土した。ことに基壇北側の瓦類には土器（須恵器・土師器）が混在していた。金属器は青銅製風招・鉄釘である。このほか、旧表土の暗褐色土層から陶磁器の小片が出土している。以下、主な遺物について報告する。

（1）　各遺構出土の土器

ＳＢ010出土土器（第６図、図版13）

須恵器

杯（１）　ほぼ完形の無高台の杯で、ＳＢ010の北側柱列の西から二番目にある柱掘形の柱根痕から出土した。柱根痕には軟かな土が詰まっていて、この杯も埋めたというよりも柱根の腐朽後の空洞に落ちこんだものであろう。口径13.0cm、器高3.6cm、底径8.3cmをはかる。外底部はヘラで切り離した後に、横方向にヘラでナデて平坦にしている。丸味をもつ体部から内底部にかけてナデで調整するが、内底の一部はていねいにミガキを加えたように平滑になっている。外底部と体部の境は明瞭でない。

ＳＫ014出土土器（第６図、図版12）

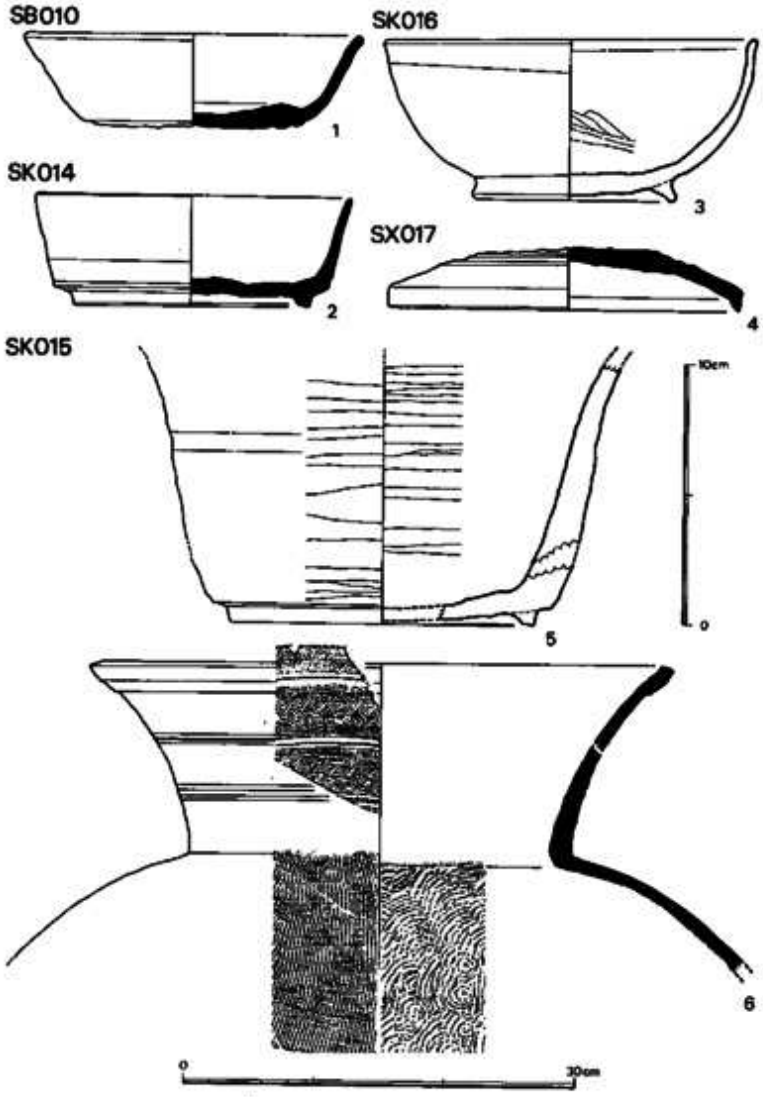
須恵器

杯（２）　ＳＫ014は暗茶色土層の除去後に検出された土壙であるが、少量の土器が出土した。２はその一つで体部の一部を欠くが、よく器形を保っている。精良な胎土を堅緻に焼成した高台を有する杯で、口径12.1cm、器高9.0cm、高台径4.3cmをはかる。ヘラで切り離された外底部には５方向の板状圧痕がみられ、互いに交差している。外底部の端から５mm内側に低い高台を付けている。直立するように立ち上がる体部は器形に鋭さを感じさせる。体部・内底部をヨコナデ・ナデで調整している。

ＳＫ015出土土器（第６図）

須恵器

甕（６）　土壙ＳＫ015には多量の瓦類とともに、多くの甕片が詰っていた。胴部中位以下と口縁部の大半を欠くが、復原すると口径44.6cm前後の大甕となる。接合した破片からみて、胴部最大径は80cmを超すと思われる。口縁部の外面上端に幅2.8cmの凸帯を貼りつけ、体部内面からこの凸帯までヨコナデしている。内面はヘラでいったん調整した上に細かくヨコナデしているが、凸帯上のそれは雑である。体部外面は頸部にかけてカキ目状に粗く刷毛目調整を加える。体部外面を２条の太い凹線で三分し、上・中に５条からなる複線波状文を描く。肩部の外面に



第6図　各遺構出土土器実測図

はていねいに縦方向に平行タタキを行ない、内面も同心円文のタタキを加えている。

土師器

椀（5）　大形の椀で、体部の半分を残す。外底部はヘラで平坦に調整され、端部のやや内側に低い高台をつけている。高台径は11.6cmである。0.8～1.5cmと分厚くつくられた体部は直立するように立ち上がるが、図の上端付近から大きく外に開くと思われる。体部には雑にヘラミガキがみられる。体部下半の立ち上がりが急であるが、大宰府跡ＳＫ1106に例をみるような大椀に復原できる。

ＳＫ016出土土器（第6図、図版13）

黒色土器

椀（3）　ほぼ完形の椀で、内面を黒色に燻しており、外面も半分近くが黒変している。体部は丸味が強く、端部をわずかに外反させている。体部と底部の境は不明瞭である。器表の残りは良くないが、体部内外面のヘラミガキがうかがわれる。口径14.4cm、器高6.1cm、高台径7.9cmをはかる。

ＳＸ017出土土器（第6図、図版13）

須恵器

杯蓋（4）　外天井部をヘラで切り離し、他をヨコナデで調整した杯蓋で、ほぼ完形である。

外天井部に撮は付かない。内天井部の一部が擦れて平滑になっている。口縁は体部の端を屈曲させつくりだしている。口径13.5cm、器高2.4cm。

（2） 第3次調査暗茶色土層出土土器(第7図、図版12)

南トレンチの西半には多量の瓦が堆積していたが、ことにSK012の北の部分に土器片が多く散乱していた。須恵器皿はこの部分で集中して出土した。

	口 径	器 高	底径・高台径
1	8.9	2.5	
2	13.0	2.5	
3	14.1		
4	15.7		
5	10.8	2.6	7.4
6	12.5	3.3	7.4
7	12.6	3.5	8.1
8	12.8	3.1	7.8
9	13.0	3.5	7.7
10	13.0	3.4	9.4
11	13.2	3.7	8.3
12	13.3	3.5	6.6
13	11.0	3.5	6.8
14	11.9	4.1	6.4
15	12.1	3.9	7.6
16	13.9	3.6	7.3
17	13.8	2.1	11.1
18	14.1	2.0	9.8
19	14.5	2.1	10.6
20	16.3	1.7	11.3
21	16.8	2.4	13.9
22	17.2	2.3	13.7
23	18.4	2.3	15.6
24	18.7	2.8	15.3
25	13.0	3.7	8.5
26	13.5	3.5	7.3
27	13.7	2.8	6.6
28	17.6		14.4
29	18.3	1.6	13.6
30	18.7	2.1	13.4

暗茶色土層

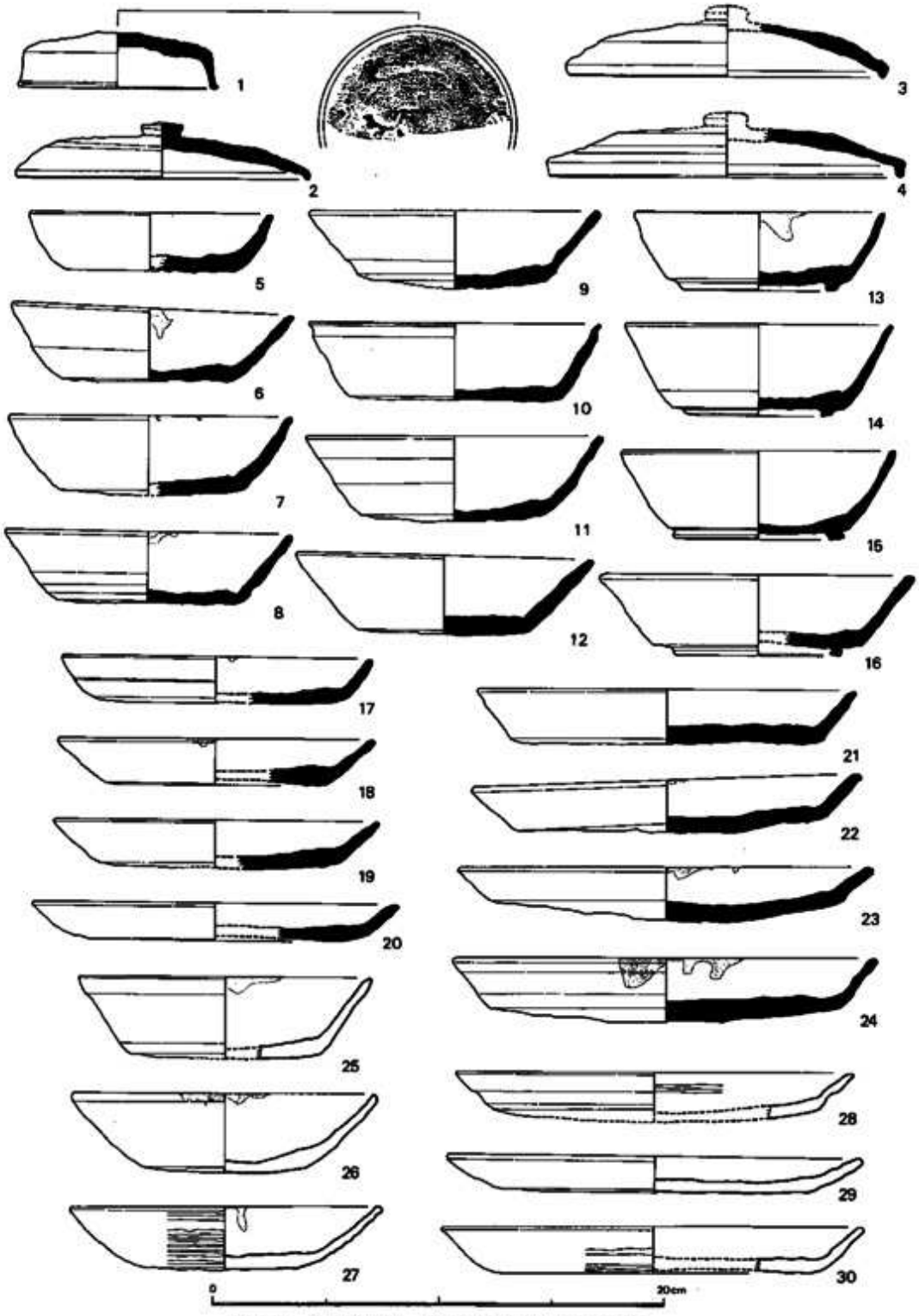
須恵器

壺蓋（1） 口径8.9cmに復原される小壺の蓋で、二分の一を欠いている。外面は口縁部付近を除いてヘラ削りし、他はナデで調整している。天井部上面の調整はあまりていねいではないが、その一部に「前」字を二字刻んでいる。

杯蓋（2～4） 2は全体をナデで仕上げた杯蓋で、端部を屈曲させて口縁としている。天井部上面には小さな撮みをつける。3・4は小破片で、4の屈曲する口縁部は高くつくられている。

杯（5～16） 5は口径10.8cmに復原できる杯の小片で、外底部をヘラ切り離しにするほかは、ヨコナデでていねいに調整している。内彎しつつ立ち上がる短い体部の形状や法量からみて、皿とすべきかもしれない。6～12はほぼ同じ形態の無高台の杯で、6・8・11はほぼ完存し、9・10の破片も残りが良い。いずれも外底部をヘラ切り離しにし、7・10・12には板状圧痕がみられ、ことに10・12は数方向が交差している。体部・内底部はヨコナデ・ナデで調整している。13～16は高台を有する杯で、椀状をなす。無高台の杯に低い高台を付ける。高台は15が裾開きになる9に対し、他はすぼまるように付けられている。13の体部内面の一部に煤状の付着物がみられる。

皿（17～24） 17～19が口径13.8～14.5cmとやや小さいのに対し、20～24は口径16.3～18.7cmをはかりやや大形である。22～24は重なるようにして出土し、残りも良い。ほぼ完存する23を例にとれば、外反気味に立ち上がる体部および内底部をヨコナデ・ナデで仕上げ、外底部をヘラ切り離しにしている。外底部はやや丸味をもつが、安定している。他の諸例も同様の調整



第7図　第3次調査　暗茶色土層出土土器実測図

で、17・19に板状圧痕がみられる。17・24は体部の立ち上がりが他よりも直で、深味を感じさせる。17・18・22～24の体部内外面の一部には煤状の付着物がみられる。

土師器

杯（25～27）　いずれも無高台の杯である。25はヘラ切り離しされた底部から体部が直線的に立ち上がる。これに対し26・27は外底部のヘラ切り離しがていねいにされ、体部は内彎しつつ立ち上がる。体部外面はていねいにヘラミガキされ、内面にも部分的にヘラミガキの痕跡がある。3点とも体部内面の一部に煤状の付着物がみられ、26は外面に及んでいる。

皿（28～30）　29は26・27と同じく赤茶色を呈する皿で、砂粒を多く含む胎土のため、それが器表に目立っている。体部は大きく開くため、深みを感じさせない。28・30は小片で、28の体部内面の一部に煤状の付着物がみられる。いずれも調整の残りは良くないが、杯と同様である。

（3）　第4次調査層位出土土器

暗褐色土層出土土器（第8図、図版13）

旧表土層にあたる。塔基壇の北側では旧社宅の基礎工事等でこの層は掘削撹乱されていて、結果的に土器は基壇の東側から出土している。このほかに平安時代の土器・陶磁器もある。

	口　径	器　高	底径・高台径
1	12.6	1.4	
2	14.6	2.9	
3	12.9	3.4	8.7
4	13.1	3.8	9.3
5	9.3	3.5	6.2
6	11.6	3.5	8.3
7	10.2	2.1	7.7
8	10.7	1.7	7.7
9	15.8	1.8	12.6
10	18.4	2.0	14.9

暗褐色土層

須恵器

杯蓋（1・2）　1は天井部・体部ともに扁平につくり、その端部を屈曲させて断面三角形状の口縁としている。天井部には小さな撮をつけている。2の体部は通例の形態で、端部をわずかにつまみ出して口縁とする。

杯（3～6）　4は無高台の杯で、ていねいにヘラ切り離しされた底部から体部が直線的に立ち上がり、端部をわずかに外へひねっている。ナデ・ヨコナデで調整した内底部・体部内面の全面に濃く油煙が付着し、外面にも薄く及んでいる。3もほぼ同形の杯で、内底に墨が付着している。墨書とも思えるが、判読できない。5・6は外に開く低い高台を有する小形の杯で、いずれも体部の内面に油煙が付着している。6は残存部から口径11.6cmに復原できるが、10cmを下まわる小形品の感がある。

皿（7～10）　7・8は口径10.2～10.7cmに復原できる小形の皿で、口縁端部に若干の違いがあるが、良く似た形をしている。内底部・体部をヨコナデでていねいに仕上げている。ともに二分の一が残る。9は口径15.8cmの中形の、10は口径18.4cmの大形の皿で、ともに体部内面の一部に煤状の付着物がみられる。

暗茶色土層出土土器（第８図、図版13）

暗茶色土層には多量の瓦類が含まれ、それとともに土器も出土している。ことに基壇の北側、土壙ＳＫ015の上面付近に土器片は集中していた。

須恵器

杯蓋（11～14）　口径13.2～15.4cmをはかる杯蓋で、体部の端部をつまみ出して屈曲させ口縁としている。14は天井部・体部ともに扁平につくられ、器高を低くしている。外天井部の中ほどに剝離痕があり、撥がつく。11は外天井部と体部との接合部に段がつき、境を明瞭にしている。12・13の内天井部は擦れて内面が平滑になっている。

	口　径	器　高	底径・高台径
11	13.2	3.3	
12	14.8		
13	15.0	2.8	
14	15.4		
15	12.4	3.2	7.7
16	13.0	3.1	7.1
17	11.8	4.3	6.4
18	14.4	5.0	8.9
19	17.2	7.2	10.1
20	14.2	1.4	10.1
21	14.4	2.3	11.7
22	15.0	2.8	11.8
23	16.1	1.7	10.7
24	13.1	3.5	7.7
25	13.6	3.3	7.1
26	15.6	3.7	8.3

暗茶色土層

杯（15～19）　15・16は無高台の杯で、ともに体部内面に煤状の付着物がつき、16は内底にまで及んでいる。15は底部を押し出し気味にし、端部で外反する体部も全体としては内彎しているため丸味の強い器形となる。これに対し、16は通例の形で、平坦な外底部からやや器肉の厚い体部が立ち上っている。17～19は高台を有する杯で、外方に開く高台をつける。17・19の高台は太く低いが、18は細身腰高につくられ内彎する体部とともに、器形を椀状にしている。17の体部内面には煤状の付着物がみられるが、かなり剝落している。

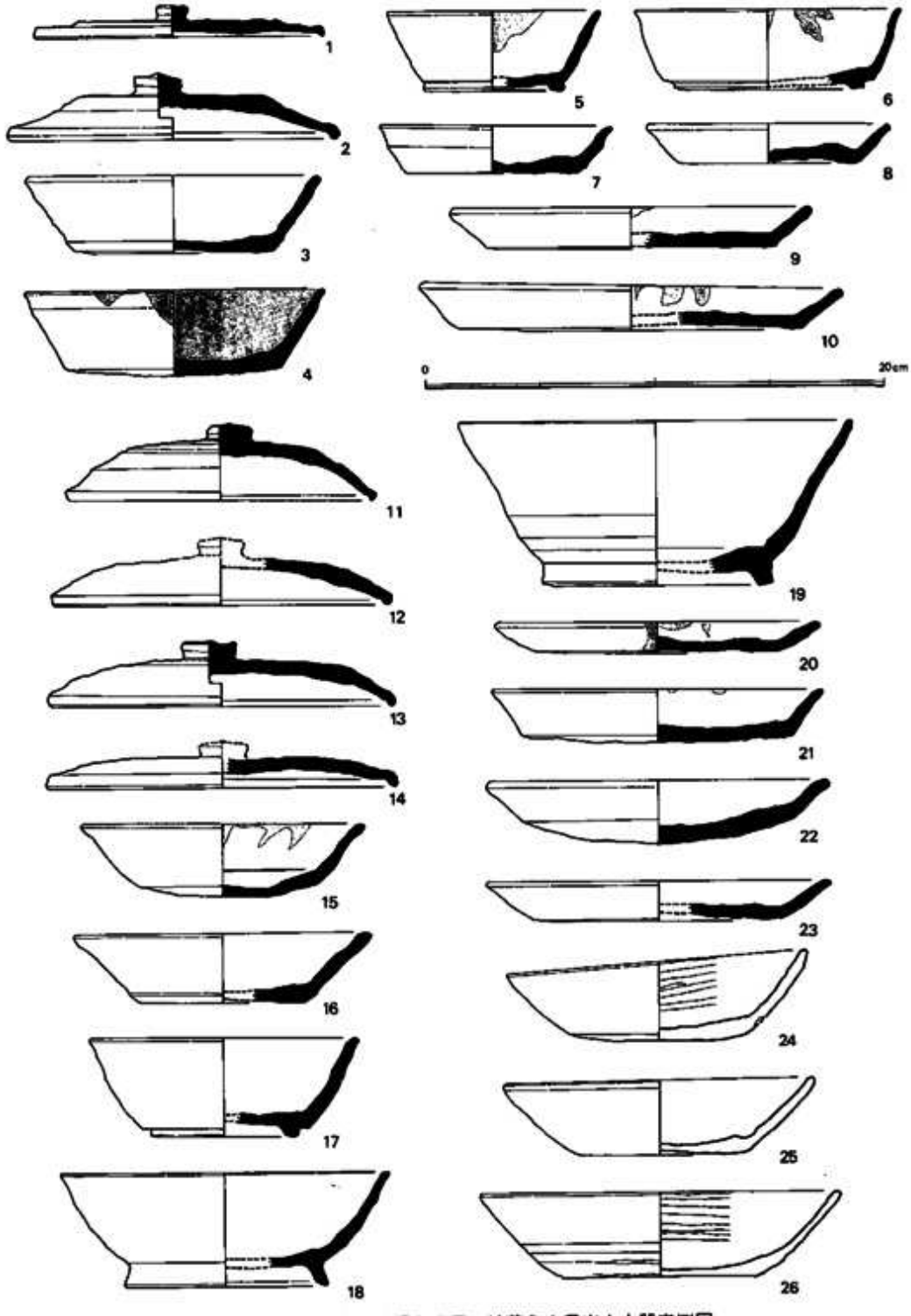
皿（20～23）　口径14.2～16.1cmに復原できる中形の皿で、ヘラ切り離しされた外底部は平坦につくられ安定している。22のみはわずかに平坦面もあるが、全体として丸味をもち杯蓋を思わせる。20の体部内外面、21の体部内面のそれぞれ一部に煤状の付着物がみられる。

土師器

杯（24～26）　24・25は赤褐色を呈し、わずかに内彎する体部の内面をヘラミガキ、外面をヨコナデで調整している。24のヘラミガキは内底部にも及んでいる。25の内面には油煙が濃く付着しているが、ほとんど剝落している。外底部はヘラ切り離しのままである。口径15.6cmと一回り大きくつくられた26は、ヘラ切り離しされた外底部を平坦に仕上げ、内彎する体部の内外面をヘラミガキしている。淡い茶白色を呈する。

暗茶褐色土層出土土器（第９図、図版14）

ここで暗茶褐色土層出土土器とする資料は、本来、暗茶色土層下層出土として報告すべきものである。そのほとんどの土器が基壇の北側、土壙ＳＫ015の上面付近に多量に散乱する瓦類とともに出土したが、それは暗茶色土層の土器の出土傾向と一致する。ただ39として図示した須恵器皿のみは掘立柱建物ＳＢ010を覆う本来の暗茶褐色土層から出土している。



第8図　第4次調査　暗褐色土層・暗茶色土層出土土器実測図

須恵器

杯（27～32）　いずれも無高台の杯で、ほぼ同様の形態をとっている。28は体部の一部を欠き、他は二分の一内外の破片である。外底部はいずれもヘラ切り離しにし、30には薄く板状圧痕がみられる。直線状に延びる体部はヨコナデ、内底部をナデで仕上げるが、30・32はヨコナデが内底にまで及んでいる。27の口縁部内外のごく一部と、29の体部内面に煤状の付着物がみられる。堅緻に焼成されているが、30のみは軟質である。

皿（33～40・A）　13.4～15.3cmの範囲に口径のおさまる中形の皿で、完存する36のほかにも33・37・39は大部分が残存している。調整は杯と同様で、34～37の外底部には板状圧痕がみられる。34は2方向の板状圧痕が交差しており、35は全面に及んでいる。39・40は体部内面に油煙が付着している。本来の暗茶褐色土層出土の39は体部外面の中位を凹状につくり、さらに端部を外方に屈曲させて、体部を大きく外反させている。体部と内底部の境に凹線をめぐらしている。内底部は擦れて平滑になっている。

	口　径	器　高	底径・高台径
27	12.3	3.5	7.7
28	12.8	3.2	7.2
29	13.4	3.5	8.3
30	13.5	3.3	8.4
31	13.5	4.1	9.0
32	14.4	3.9	8.2
33	13.4	2.1	10.2
34	13.6	2.0	8.9
35	13.7	1.7	10.8
36	13.8	2.5	10.0
A	13.9	2.7	11.4
37	14.0	1.9	10.8
38	14.1	2.2	10.9
39	14.2	1.9	11.9
40	15.3	2.1	12.2
41	12.4	3.7	7.0
42	13.1	3.4	7.6
43	13.2	4.1	7.4
44	13.2	2.7	7.8
45	13.2	3.7	6.9
46	13.4	2.7	7.3
47	14.2	2.9	7.6
48	17.3	7.9	9.0
49			10.8
50	18.2	1.7	14.0
51	18.5	1.7	14.8

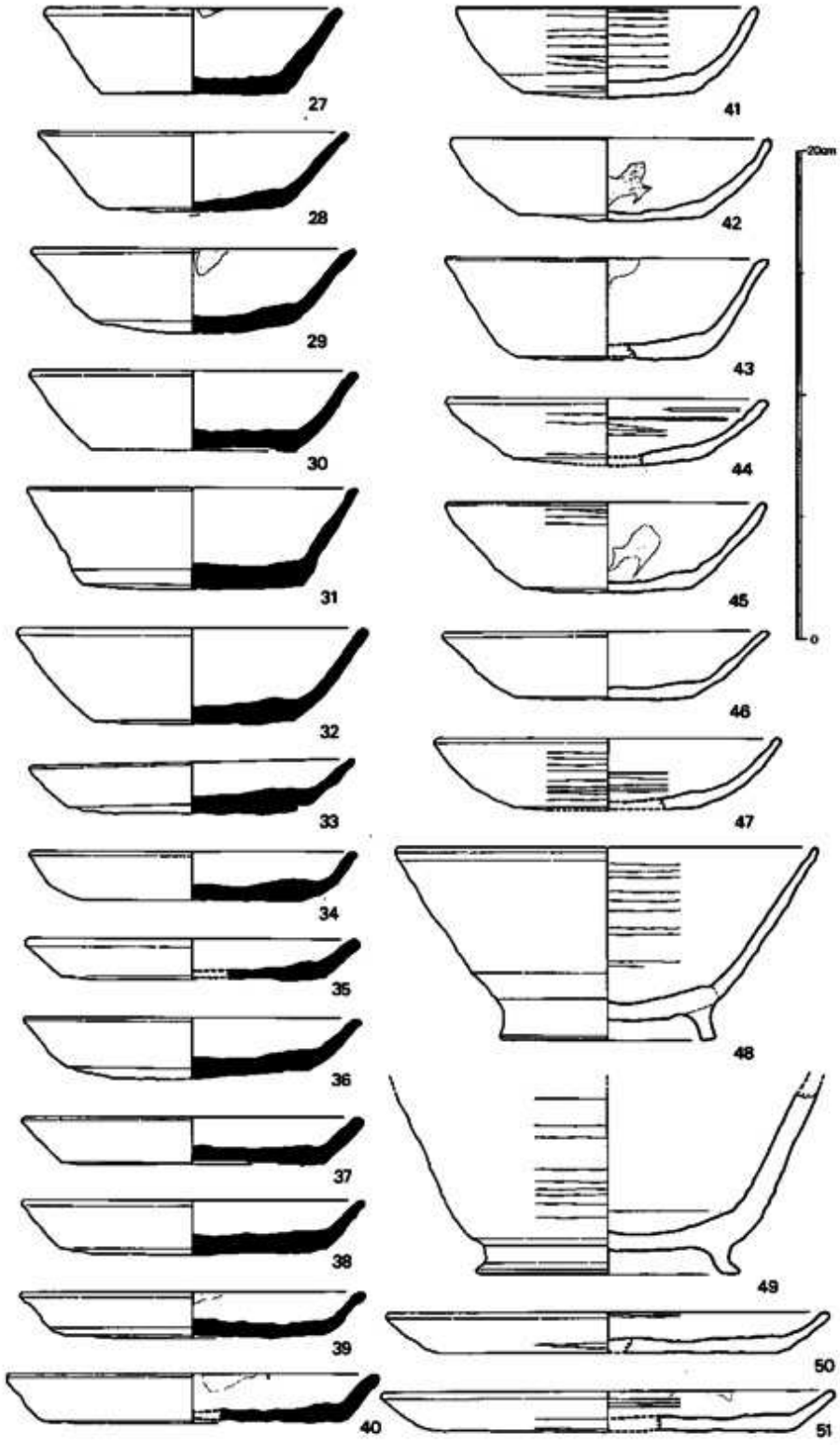
暗茶褐色土層

土師器

杯（41～47）　41～47は無高台の杯である。41・42・44・45・47は赤茶色を呈し、平坦にヘラ切り離しされた外底部に内彎する体部のつく杯で、このタイプの破片が他にくらべて多い。体部は内外面ともにヘラミガキしているが、ヨコナデを加えるものもある。43は体部が直線状に延びるタイプで、器高も高い。茶褐色を呈する。46は前者のタイプに近いが、体部が直線的で丸味に乏しい。黄白色を呈する。41～43・46の体部内面の一部に煤状の付着物がみられる。

椀（48・49）　48は砂粒を含んだ胎土を用いた椀で、口径17.3cm、器高7.9cm、高台径9.0cmの大形のものである。赤茶色を呈する。器表の残りは良くないが、体部内外面をヘラミガキし、さらに外面にはヨコナデを加えている。49は赤茶色を呈する椀の体部下半以下の破片で、器肉の厚さや堅固な高台からみて、48よりもさらに大形の椀となる。大宰府史跡ＳＫ1084などで口径26cm前後の大椀が知られているが、器形からみて同様に復原できるよう。

皿（50・51）　口径18.2～18.5cmの皿で、精良な胎土を赤茶色に焼成している。外底部をヘラで平坦に切り離し、他の部分をヘラミガキで仕上げている。体部内面に油煙が付着している。



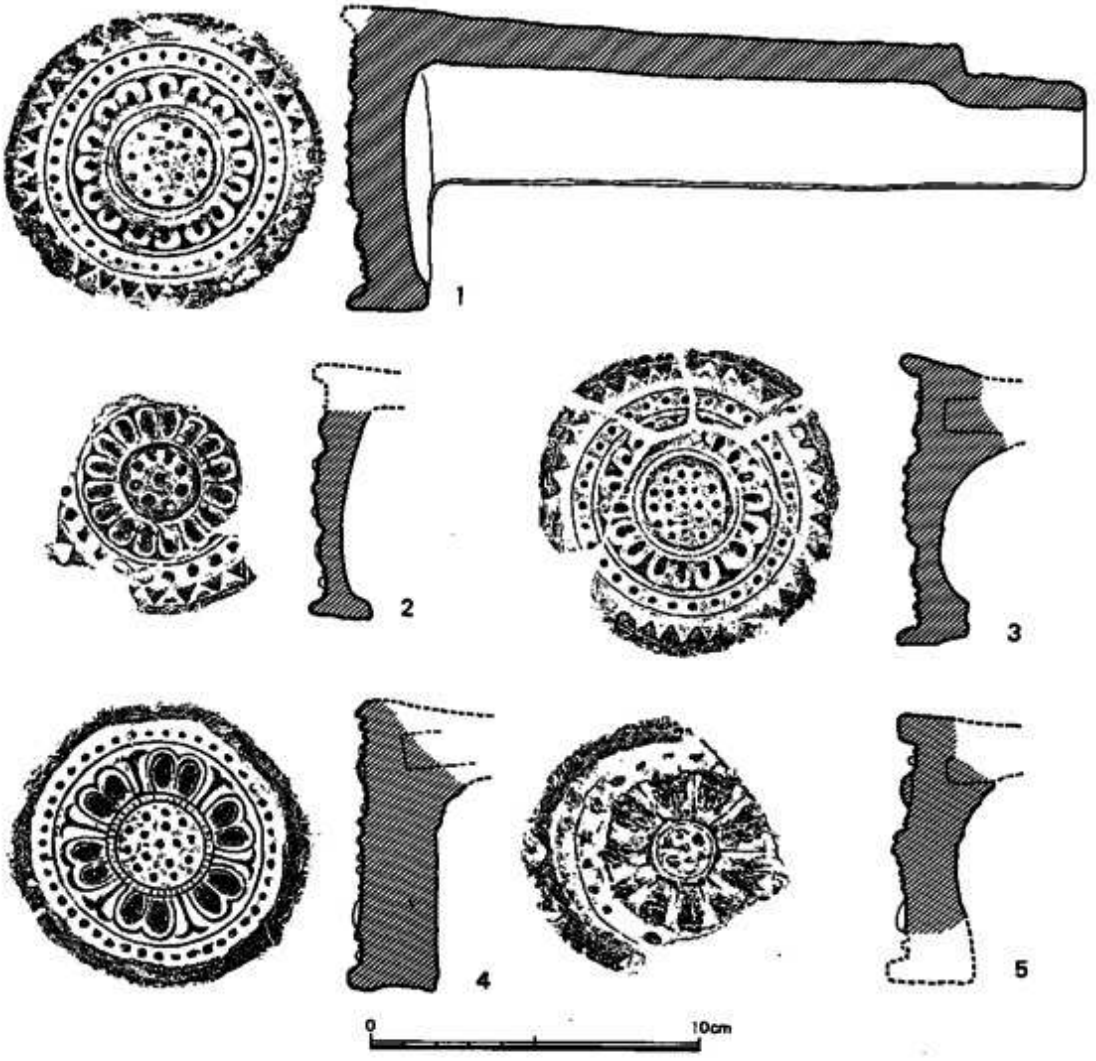
第9図　第4次調査　暗茶褐色土層出土土器実測図

（4） 瓦 類

この調査で出土した瓦類は丸・平瓦のほか軒丸瓦44点、軒平瓦57点および道具瓦として面戸瓦１点と鬼瓦１点がある。これらは主に塔瓦積み基壇北側で検出したＳＫ015および遺構面を覆う暗褐色土層、暗茶色土層から出土した。

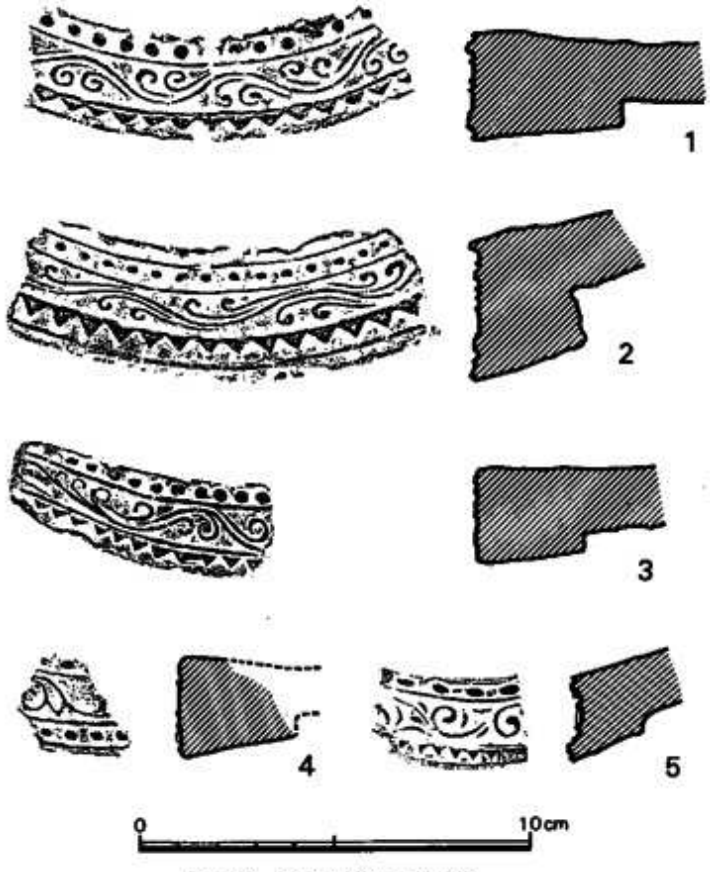
軒丸瓦（第10図、図版15）　５型式に分類できる。内訳は１が19点で最も多く、２が３点、３が７点、４が11点、５が４点である。

まず１は複弁八弁蓮華文で圏線によって囲こまれた一段高い中房に１＋６＋10の蓮子を配する。弁は短く、横幅が広い。間弁が界線状に連続し、一見単弁風に見える。外区は内縁に珠文



第10図　軒丸瓦拓影・実測図

36個、外縁にやや縦長の凸鋸歯文31個を配する。瓦当裏面は強いナデによって調整しており、下端部には幅2cmの突帯がめぐる。丸瓦の取り付けは珠文帯と鋸歯文帯の境付近でやや高い位置にある。丸瓦凸面はヨコナデによって調整しているが、瓦当部付近はヘラケズリによっている。2は単弁十六弁蓮華文で圏線で囲まれた一段高い中房に1＋8のやや大きな蓮子を配する。外区は内縁に珠文、外縁に外向凸鋸歯文を配する。瓦当裏面は1と同様に強いナデによって調整するとともに、下端部には幅1cm程度の凸帯がめぐる。3は複弁八弁蓮華文であるが割り付けが悪く間に1個の単弁が混じる。圏線によって囲こまれた一段高い中房には1＋8＋12の小さな蓮子を配する。外区には内縁に小さな珠文30個を、外縁に内向する凸鋸歯文31個を配する。丸瓦の取り付け位置は蓮華文付近にある。瓦当裏面は強いナデによって調整する。また下端部には幅2cm程度の凸帯がめぐる。瓦当厚が4.5cmあり他の軒丸瓦にくらべて厚い。4は複弁六弁蓮華文で櫛歯文によって囲こまれた比較的大きな中房には1＋5＋10の蓮子を配する。弁は肉盛りが厚い。1個所間弁の部分に笵型のキズがある。外区には内縁に43個の珠文を密に配し、外縁は断面がカマボコ形で素文である。瓦当厚が4.5cmあり他の軒丸瓦にくらべて厚い。丸瓦の取り付け位置は弁区付近にあり低い。裏面は粗雑なナデによって調整している。全体的に黒く焼け上った物が多い。5は単弁十弁であるが文様の割り付けが粗雑で弁は不揃いである。圏線によって囲こまれた中房は半球状に盛り上り小さい。中に1＋6の蓮子を配する。弁はいずれも中央部に稜線が走る。外区は内縁に偏円形の珠文を配し、外縁は素文の平縁である。丸瓦の取り付け位置は弁区付近にあり低い。瓦当裏面はナデによって調整している。

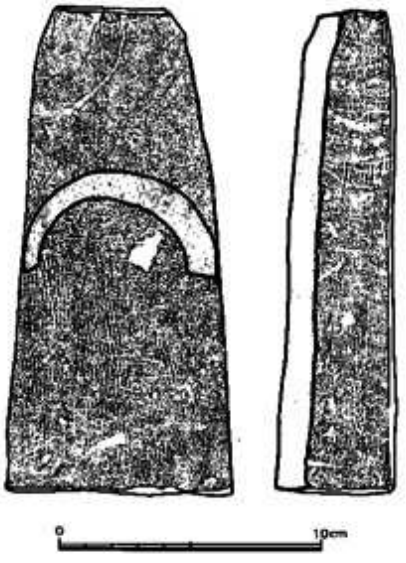


第11図　軒平瓦拓影・実測図

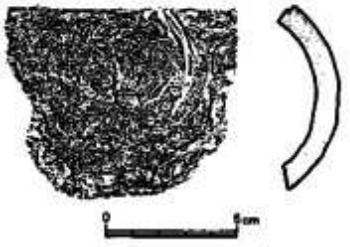
軒平瓦（第11図、図版15）　3型式5種類に分類できる。内訳は1が24点で最も多く、2が11点、3が13点、4が1点、5が8点である。

1は内区に右から左へ流れる偏行唐草文を配し、上外区に珠文、下外区に凸鋸歯文をめぐらす。内区唐草文は連続する波状の曲線文の上下に2個の支葉が派生するが、いずれも曲線文からは遊離している。顎は平瓦部凸面に粘土を貼りつけて段顎に成形している。顎面はヘラケズリによって調整している。平瓦部にベンガラが認められる。2は内区、外区とも1と全く同様の文様構成をとるが、内区の偏行唐草文が1よりもややゆるやかな流れとなり、また、上外区の珠文がやや小さく半球状になる点が異っている。顎は1と同様に段顎に整形する。平瓦凸面は縦位の縄の叩き目が残る。3は内区文様が左から右へ流れる偏行唐草文であるが、いずれも断片であるため全体の文様構成は不明である。上外区は偏平なボタン状の珠文を密に配し、下外区には凸鋸歯文を配する。内区、外区とも文様の彫りが浅い。顎は粘土を貼り付けて段顎に整形している。顎面、平瓦凸面はヘラケズリによって調整している。4は小片であるため全体の文様構成を窺い得ないが、左から右へ流れる波状曲線文の上下に蕾状の文様を配している。上外区、下外区には偏平なボタン状の珠文を配する。3と同様に文様の彫りは浅い。顎は段顎に整形し、顎面はヘラケズリによって調整している。5はいわゆる鴻臚館式で、内区文様は「小」字形の小葉を配した曲線文を中心飾として、その左右に四回反転する唐草を配した均正唐草文である。上外区には長円形の珠文を配し、下外区には小さな凸鋸歯文を密に配している。顎は段顎で、顎面はヘラケズリによって調整している。

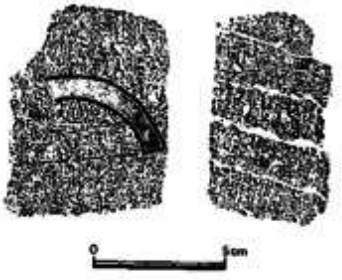
道具瓦（第12図、図版16）　面戸瓦と鬼瓦とがある。面戸瓦は焼成後に丸瓦広端部側を打ち欠いて面戸瓦に作り替えた、蟹面戸である。長さ18.5cm、幅14.2cmである。凸面調整はナデによっている。凹面は未調整で布目圧痕を残す。鬼瓦は下辺中央部の小片で歯の一部と釘穴および下辺中央の半円形くりこみの一部が残っている。胎土はほとんど砂粒を含まず、精良である。



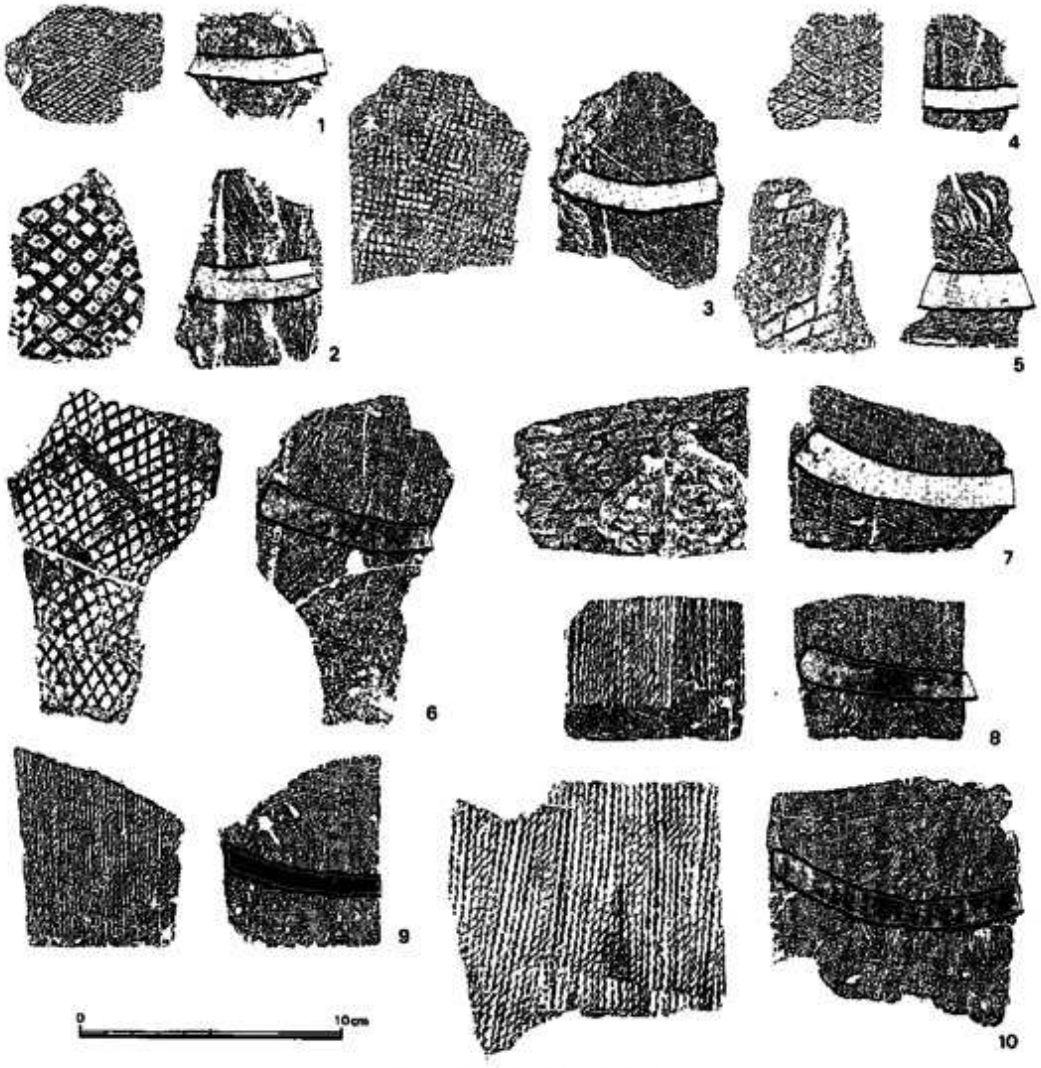
第13図　丸瓦拓影・実測図



第12図　道具瓦拓影・実測図



第14図　丸瓦粘土紐痕跡拓影・実測図



第15図　平瓦拓影・実測図

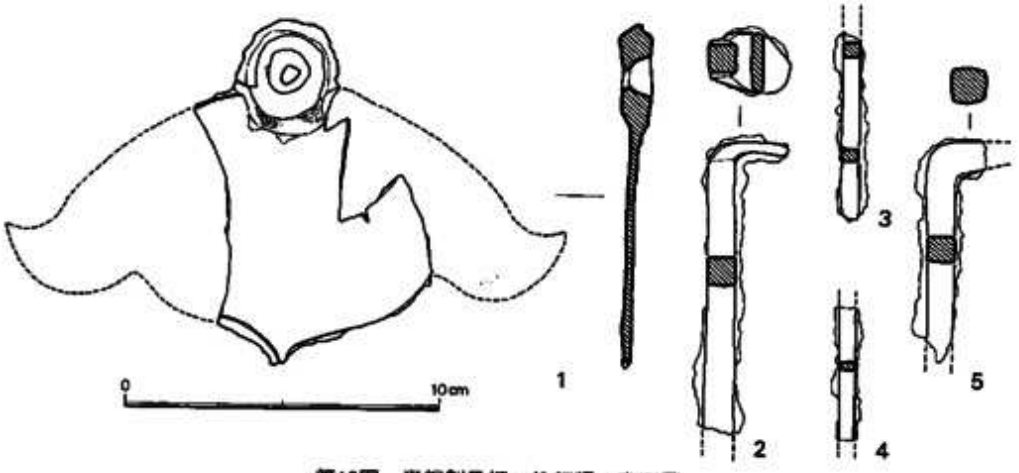
丸瓦・平瓦（第13～15図、図版16・17）　丸瓦・平瓦とも完全なものはほとんどない。丸瓦は玉縁丸瓦と行基丸瓦がある。第13図に示した行基丸瓦は唯一の完形品である。凸面は縦位の縄叩きを行ったのち横方向のナデで調整している。凹面は布目圧痕のままである。両側縁はいずれも分割載面と破面の凹凸を残したままで調整は行っていない。胎土は砂粒を多量に含み荒い。また第１次成形技法は粘土板巻きつけ技法によったものがほとんどであるが、第14図に示したように粘土紐巻きつけ技法によったものが若干ある。粘土紐の幅は約３cmで、紐のつなぎ目が顕著に残っている。平瓦は第１次成形技法としてはすべて桶巻き作りによっていると判断される。凹面に残された痕跡や破面の観察によると粘土紐桶巻き作りと粘土板桶巻作りに分類

きる。第15図に示したもののうち1、2、7、8には粘土板の合せ目の痕跡が観察できる。また10は凹面に残る痕跡および破面の粘土の皺の状況から粘土紐によっているものと考えられる。凸面の叩き痕は叩き目のものがほとんどであるが、正格子、斜格子の叩き目によるものが少量含まれている。縄叩き目のものは縄目の大きさから大、中、小の三種類に大別できる。

（5）　金属器（第16図、図版18）

青銅製風招（1）　塔基壇北側の暗茶褐色土層から瓦類・土器とともに出土した。風鐸の下部に吊される風招の一部で、全体の約半分が残るが、両端を欠いている。銹で濃い緑色を呈する。残存部の横幅7.6cm、縦幅11.0cmをはかる。厚さ約3cmの青銅板からなる身の下端を葉形につくっているが、表裏で范型の合わせにズレが生じている。図の葉頭の左、および右2.2cmまではこの范型のズレが認められ、本来の外縁である。それよりも右はズレがなくなり、しかも研磨されておらずあるいは破損面かも知れない。しかし残りの良い他の部分をみても研磨されておらず鋳放しされており、その描く曲線からみて原形をとどめると判断した。身の上端には最大厚1.05cmにつくられた吊金具を取り付けるための環部があり、径約6mmの孔をつくっている。環部の左にはわずかに丸味をもつ身の上縁が残り、やはり若干范型がズレている。このズレは環部にもおよんでいて、身部と環部の同鋳を示している。

鉄釘（2～5）　いずれも塔基壇外周の暗茶色土層から出土した。2は断面正方形で一辺9mmの角棒の先端を叩いて屈曲させ、厚さ4mmの扁平な頭部に仕上げた釘で、残存長8.3cmをはかる。3は釘の先端部で、折損部上端は一辺6mmの断面正方形であるが、先端に向かうにしたがって扁平になる。仮りに2・3が釘の頭部と先端であれば、長さは20cmを越えるものとなる。4は断面長方形の棒状鉄製品で、2・3とは断面形を異にするが、出土位置からみて釘であろう。5は1と同じ一辺9mmの角棒であるが、屈曲する頭部の基部付近で一辺12mmといったん太くなり、すぼまっていく形状からみて、鉄釘でも鋲であろう。



第16図　青銅製風招・鉄釘類・実測図

V　調査の成果

前報告で検討したように、般若寺には「上宮聖徳法王帝説」裏書にみえる般若寺との関係、あるいは筑紫野市所在の塔原廃寺との関係という解明すべき大きな問題が残されている。しかし、今回の調査ではこれに関して新たな知見を得ることはできなかった。そこで以下に今回の成果を簡単にまとめておきたい。

昭和54年度の第２次調査で、出土の瓦類・土器から般若寺塔は７世紀末～８世紀初頭に創建された瓦積み基壇の建物であることが知られた。今回も創建後の多数の瓦類・土器資料を得ることができ、この点を再確認した。加えて、前回の北西隅に続いて塔基壇の北東隅を確認したことによって、般若寺塔基壇の東西幅は11.9mであることが確定した。つまり、般若寺塔は一辺11.9m、すなわち40尺（単位尺：１尺＝29.75cm）の基壇をもつことが明らかとなった。第２表にみるように、一辺40尺前後の規模の基壇は各地の古代寺院の塔にみることができ、この点からもこの基壇が塔であることが裏書きされる。同様に、この表から、塔建物の規模が一辺20尺前後であることも知られる。大宰府周辺で規模を復原できる塔建物に筑前国分寺と観世音寺がある。前者は一辺58尺の基壇上に一辺30尺（10尺等間）の塔が建ち、瓦積み基壇という共通性はあるが、規模の大きさでは比較にならない。これに対し観世音寺は基壇の形状・規模は不明であるが、残存礎石から鏡山猛氏によって一辺20尺（６＋８＋６）の塔が復原されている[11]。このように、塔心礎の心柱枘穴が一回り小さいものの、般若寺にも観世音寺とほぼ同規模の塔が建てられていたとみてよかろう。

国　名	寺　名	基壇一辺幅	柱間寸法
筑前国（福岡県）	般若寺	40尺	尺
豊前国（大分県）	虚空蔵寺	38.5	17.5(5.5+6.5+5.5)
〃（〃）	宇佐弥勒寺	38	18　(6+6+6)
伊予国（愛媛県）	法安寺	40	20　(6.5+7+6.5)
讃岐国（香川県）	開法寺	37.7	19.5(6.4+6.7+6.4)
備後国（広島県）	宮の前廃寺	43	21　(7+7+7)
備前国（岡山県）	百田廃寺	38.5	23.5(7.25+9+7.25)
伯耆国（鳥取県）	大寺廃寺	40	
〃（〃）	斎尾廃寺	41	21　(7+7+7)
摂津国（兵庫県）	猪名寺	39	
〃（〃）	伊丹廃寺	43	22　(6.5+9+6.5)
〃（大阪府）	四天王寺	39	
〃（〃）	百済廃寺	40	18.5(6+6.5+6)、19(6+7+6)
河内国（〃）	野中寺	40	20　(6.75+6.5+6.75)
和泉国（〃）	禅寂寺	40	21　(6.5+8+6.5)
大和国（奈良県）	川原寺	39	20　(6.67+6.67+6.67)
〃（〃）	和田廃寺	41	24　(8+8+8)
〃（〃）	定林寺	38	19.5(6.5+6.5+6.5)
〃（〃）	山田寺	43	22　(7+8+7)
近江国（滋賀県）	南滋賀廃寺	42	
〃（〃）	瀬田廃寺	43	
美濃国（岐阜県）	美濃弥勒寺	39	21　(7+7+7)
尾張国（愛知県）	北野廃寺	38	
伊勢国（三重県）	額田廃寺	37	
常陸国（茨城県）	新治廃寺	40	18　(6+6+6)
陸奥国（宮城県）	多賀城廃寺	37	21　(7+7+7)

（宮本長二郎「飛鳥・奈良時代寺院の主要堂塔」『法隆寺と斑鳩の古寺』から作成）

第２表　古代寺院の塔の規模

青銅製風招の出土もこの基壇が塔跡であることを示している。風招は寺院の堂塔の軒の四隅に吊り下げられる風鐸に釣手で垂下される発音補助具で、古代寺院からの出土例は本例の他に和歌山県佐野廃寺、同三栖廃寺、奈良県山田寺跡、同山村廃寺、同菅原遺跡(長岡院跡？)、京都府山城国分寺跡２例、同周山廃寺、大阪府野中寺、同海会寺跡、兵庫県伊丹廃寺、同但馬国分寺跡、鳥取県伯耆国分寺跡、福岡県観世音寺、鹿児島県薩摩国分寺跡の15例が知られている。各寺院における風招の出土位置をみると、観世音寺例が小子房跡、薩摩国分寺跡例が講堂の周囲である点を例外として、他例はすべて塔の周囲にみられる。観世音寺の場合、延喜五年資財帳に塔に鐸四口があったと記されていて、鐸にともなって塔に風招が存在したことが考えられる。ともあれ、風招が塔の周囲から出土する事実からみて、般若寺基壇を塔のそれとする傍証とできよう。なお、これらの風招の材質には菅原遺跡・周山廃寺・伊丹廃寺・薩摩国分寺跡の鉄製例、観世音寺の土製例もあるが、他はすべて金銅製ないしは青銅製（渡金例を含む）である。般若寺跡出土風招は、岩本正二・西口寿生両氏[2]や近年風招を検討された江浦洋氏の分類[3]に従えばB型式に属することになるが、ともあれ出土位置・形状・材質などの点で西日本各地の諸例と比較できる九州での初の例といえよう。

塔基壇東側の下層検出の掘立柱建物の性格も問題となる。これが塔に先行することは疑いないが、その構築の時期は明らかでない。この建物には一辺1.8m、深さ1.6mに及ぶような巨大な柱掘形がみられ、しかも柱を粘土で版築状にていねいに固めて埋めている。こうした掘形の規模や埋土の例は大宰府府庁域内の諸建物に類をみないもので、おそらくは大宰府政庁第Ⅰ期に並行する時期（７世紀後半代）のものであろうが、この建物の背景の強固さをうかがわせている。これが般若寺の前身建物であれば問題はないが、礎石を用いないことや瓦を葺いていない点からすれば、寺院とするには躊躇がある。寺院ということになれば、筑紫大宰帥蘇我臣日向が孝徳天皇の冥福を祈って白雉５年（654）に建立した般若寺である可能性が生じかねないが、塔原廃寺を考えればそれは瓦葺礎石建物であったろうから、寺院でない可能性が強かろう。その場合、規模からみて大宰府に付属する何らかの施設と思われるが、それを判断する資料はない。

昭和62年の太宰府市教育委員会の大宰府条坊第63次調査で、今回の調査地と同じ丘陵上の北西方で掘立柱構が検出されている。この構が塔・掘立柱建物とどのように関連するか不明であるが、予想以上に遺構の残存に期待できることが明らかになっただけに、今後のこの丘陵全域の綿密な調査によって般若寺をめぐる諸問題の解明をはかりたい。

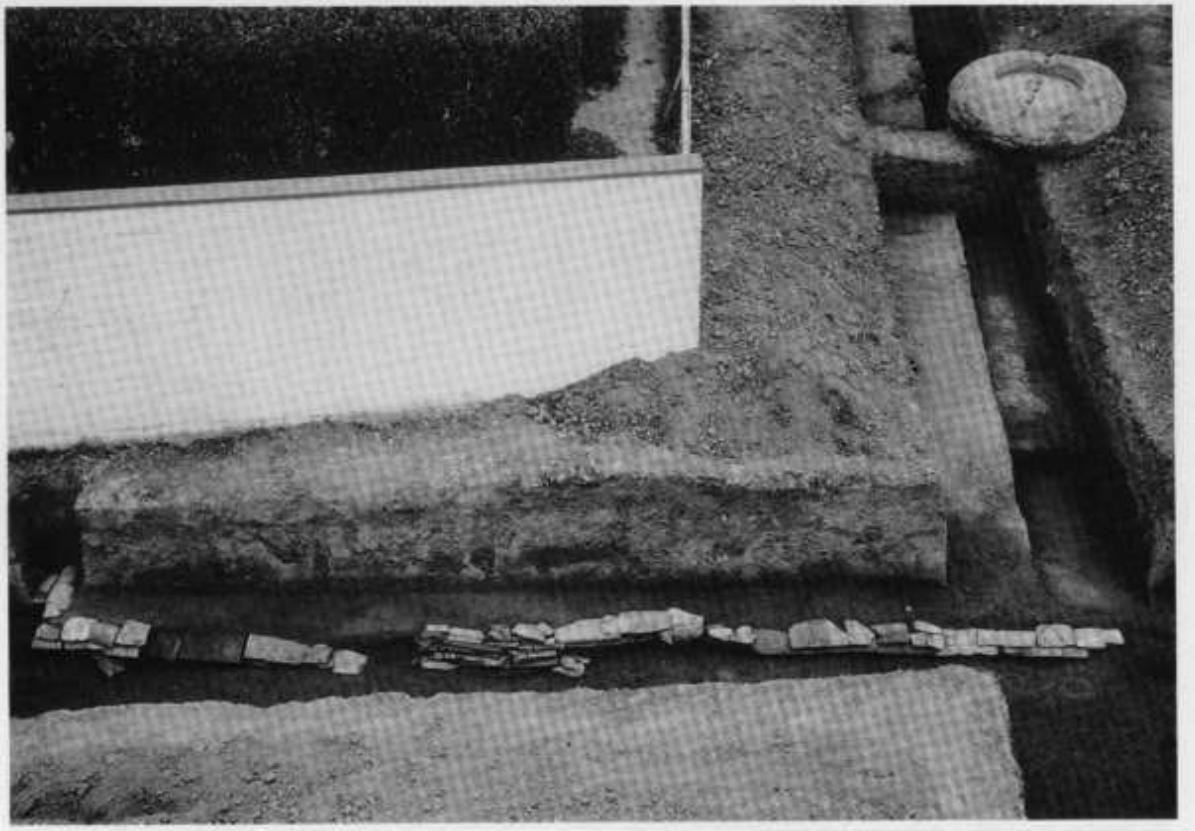
註（１）　鏡山　猛「大宰府と観世音寺の礎石について」(『史淵』101）1969

（２）　岩本正二・西口寿生「飛鳥・藤原地域の出土遺物」(『考古学雑誌』63－１）1977

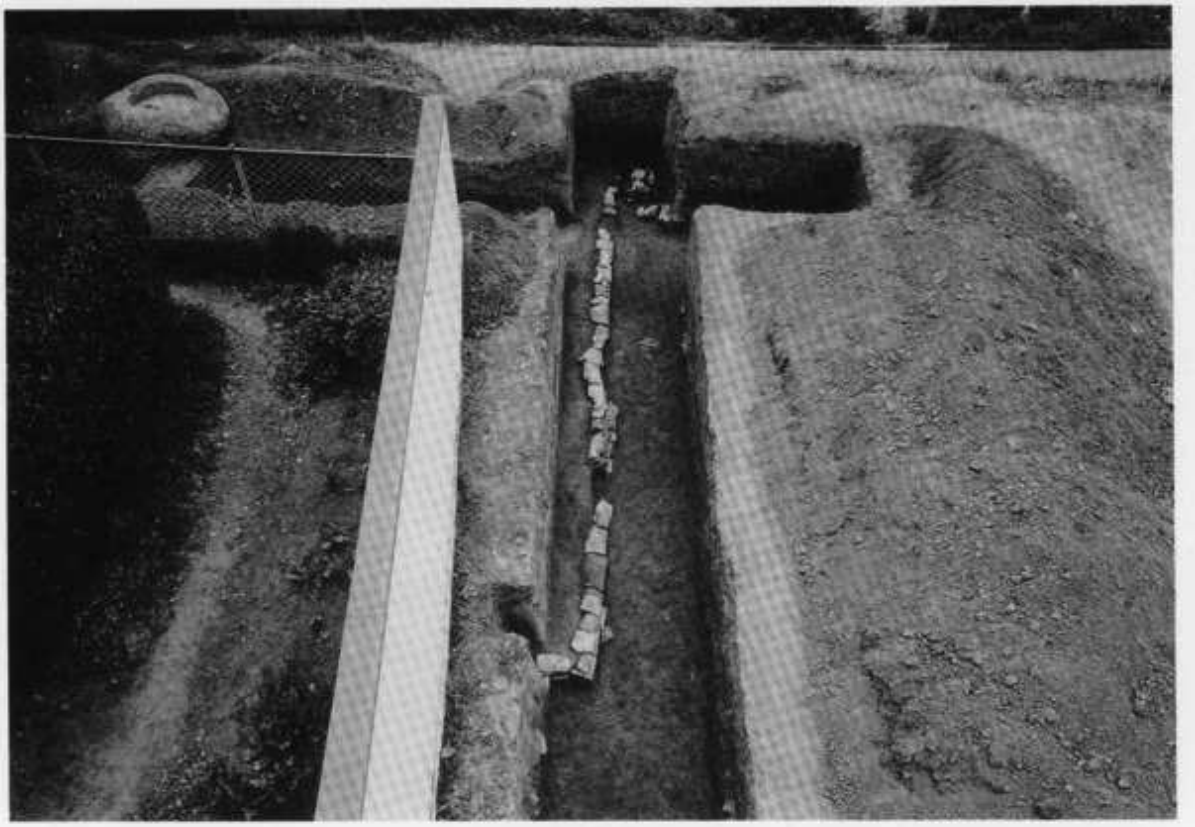
（３）　江浦　洋「風招の検討」(『菅原遺跡』奈良大学平城京発掘調査報告書１）1982

図　　版

般若寺跡周辺航空写真



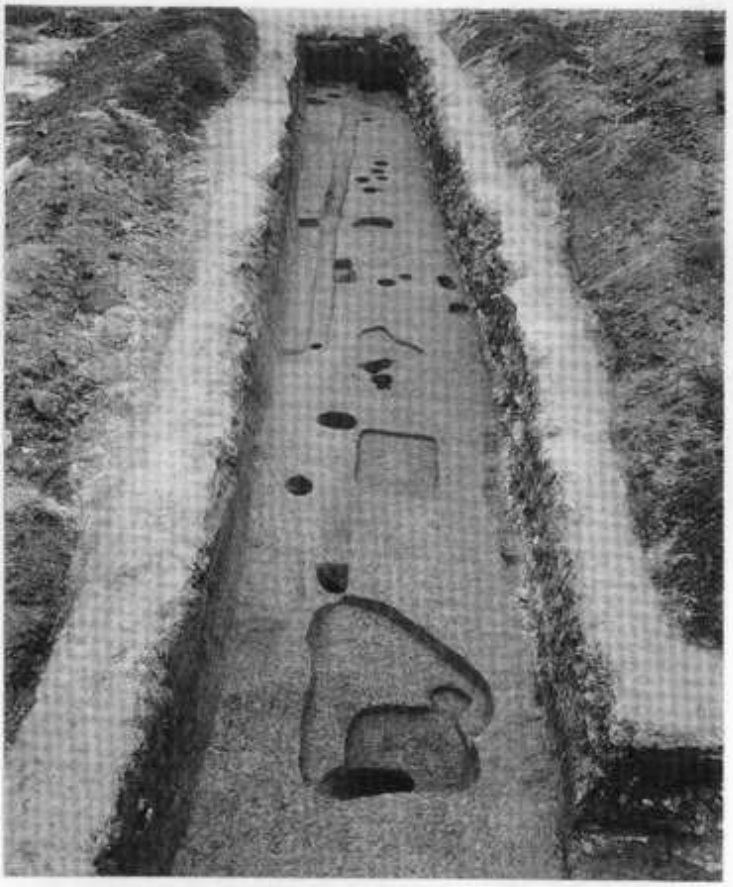
昭和54年第２次調査検出の塔ＳＢ001基壇と塔心礎（西から）

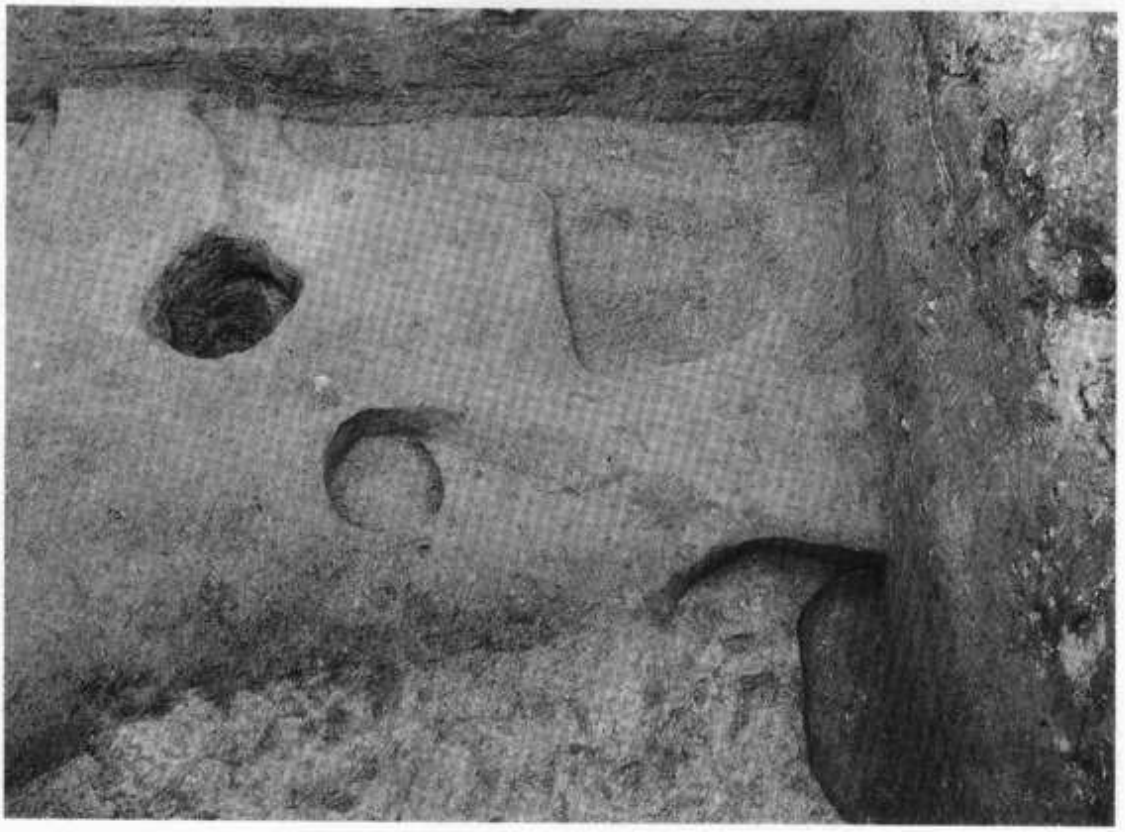


同上（北から）

第３次調査

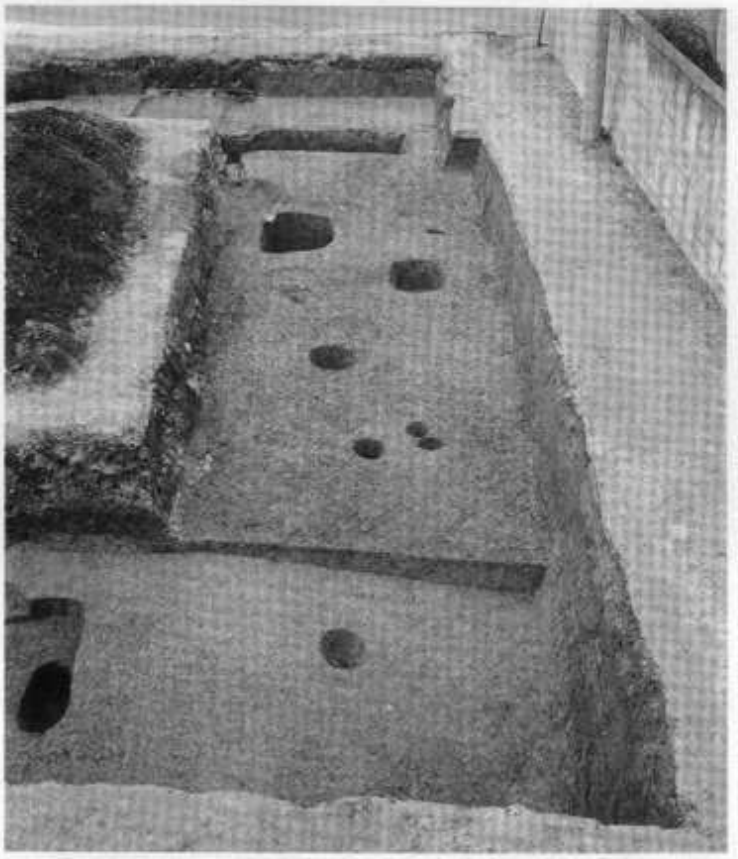
南トレンチ（東から）





第３次調査　南トレンチ西端検出のＳＢ001瓦積み基壇掘込地業（北から）

図版 4

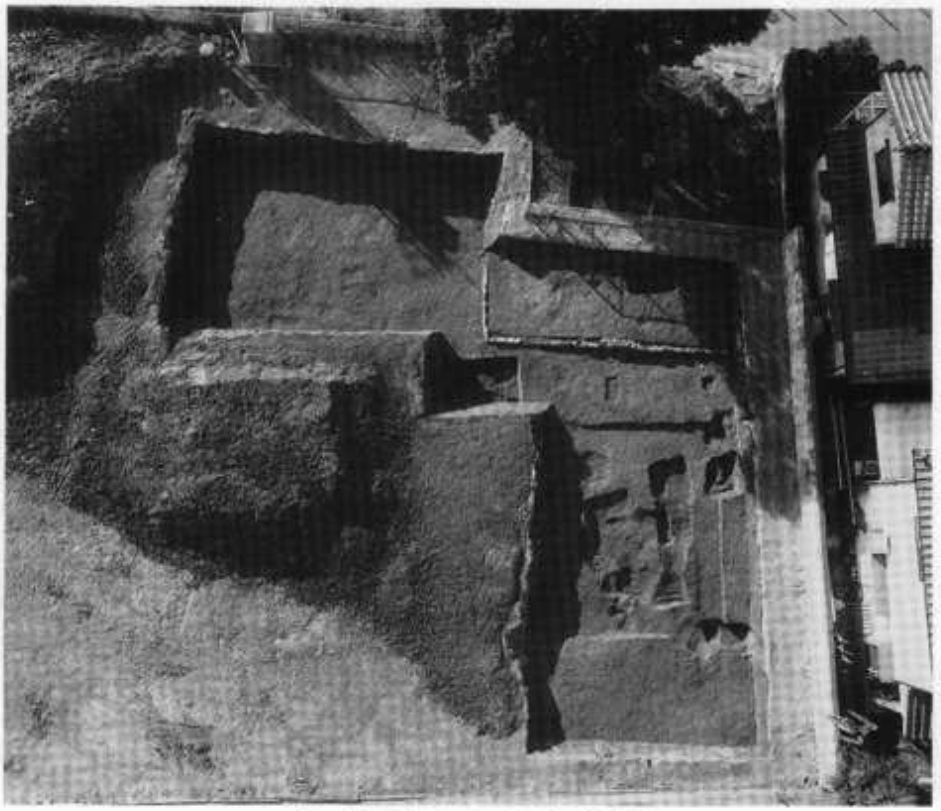


第 3 次調査

東トレンチ（南から）

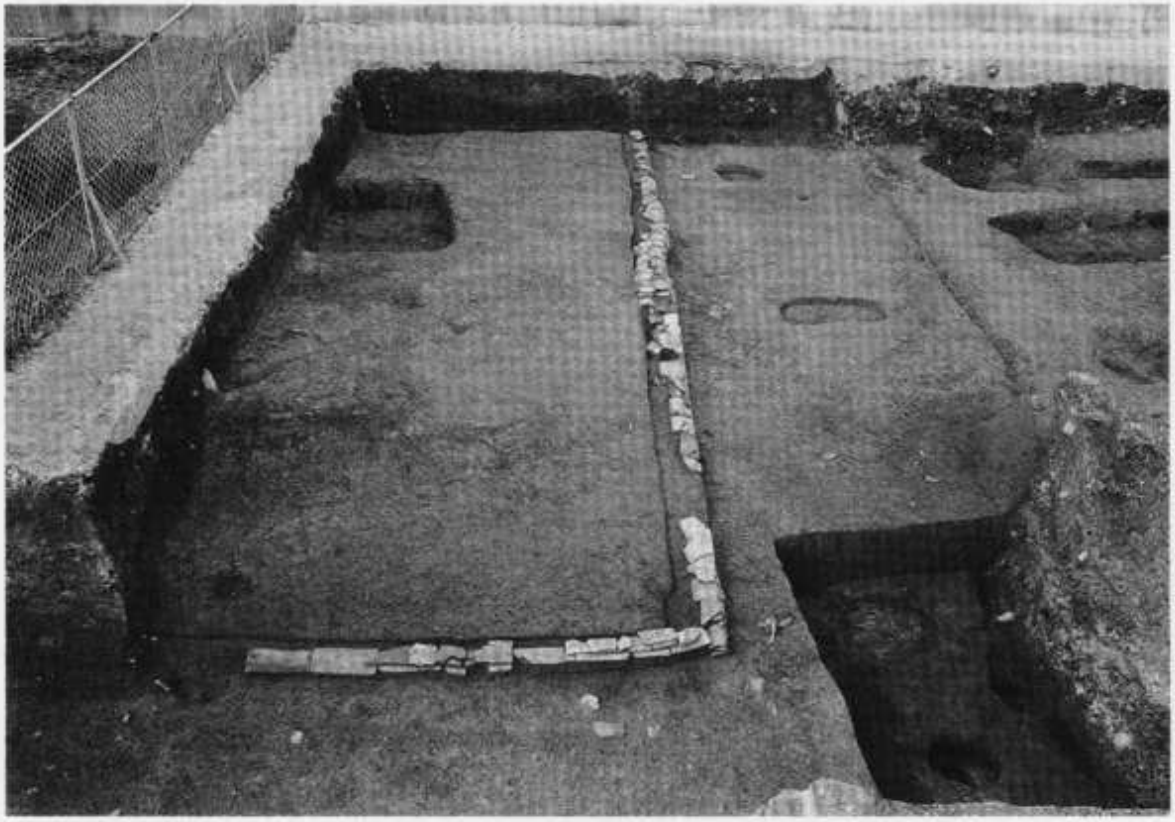
北トレンチ（西から）

第 4 次調査　塔ＳＢ001基壇の全景（空中写真、北東から）

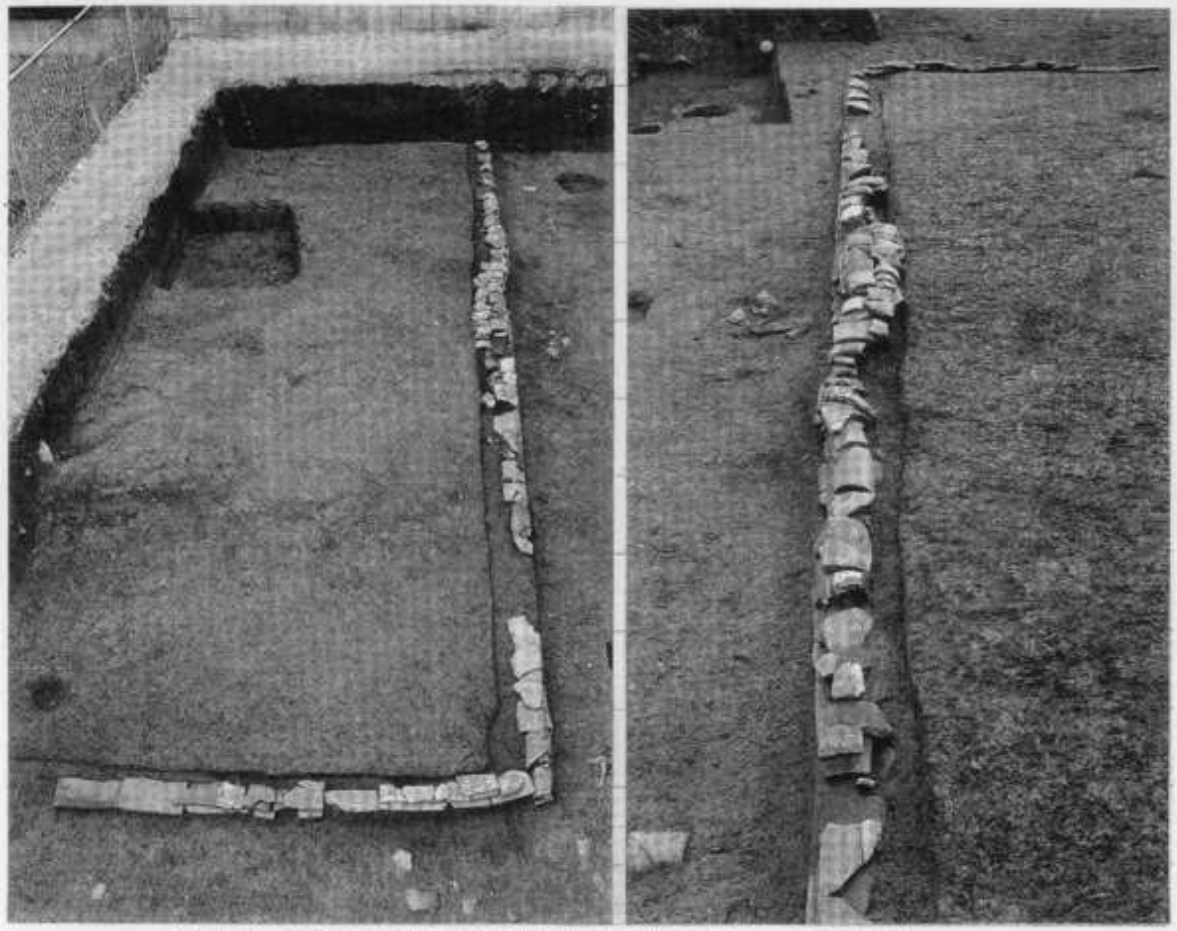


第 4 次調査区の全景（空中写真）

第 4 次調査　ＳＢ001瓦積み基壇近景（北から）



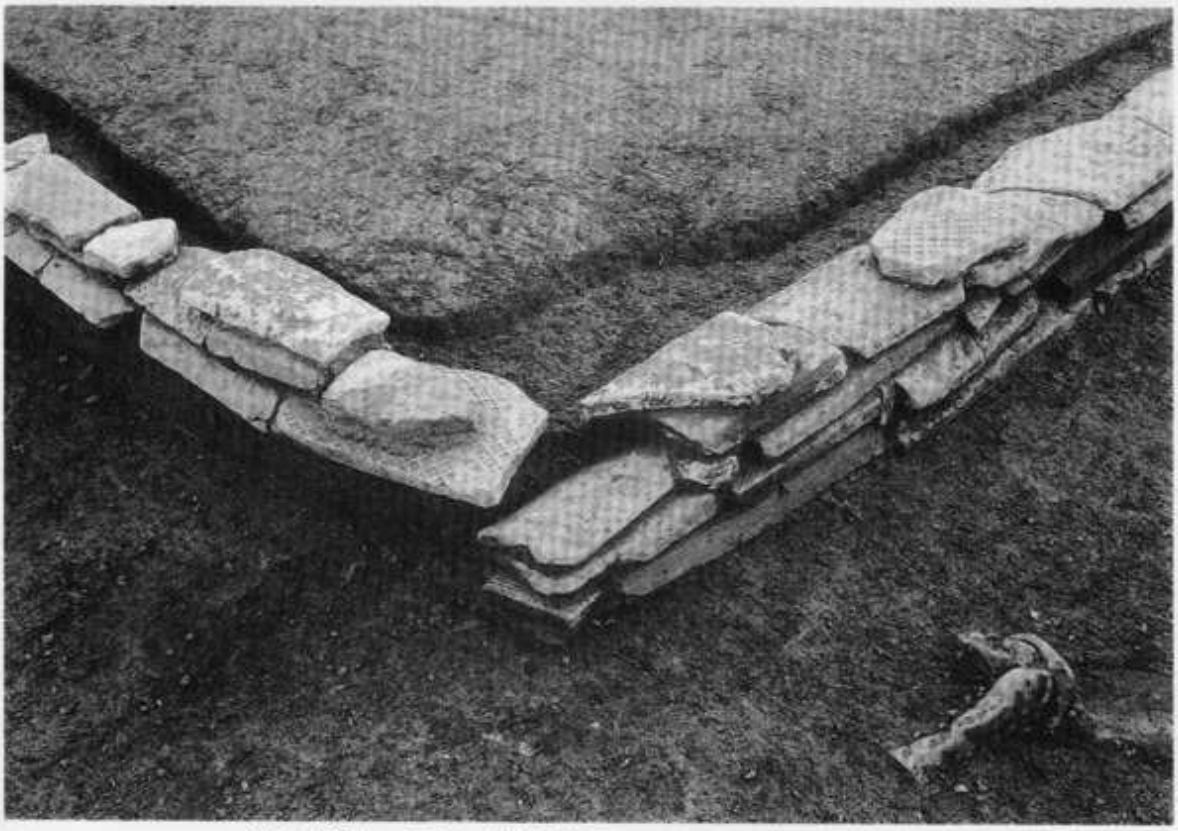
第 4 次調査　ＳＢ001瓦積み基壇近景（東から）



第 4 調査　SB001瓦積み基壇の基壇化粧（左：東から、右：西から）

基壇外の瓦の散乱状態（メモ用写真から）

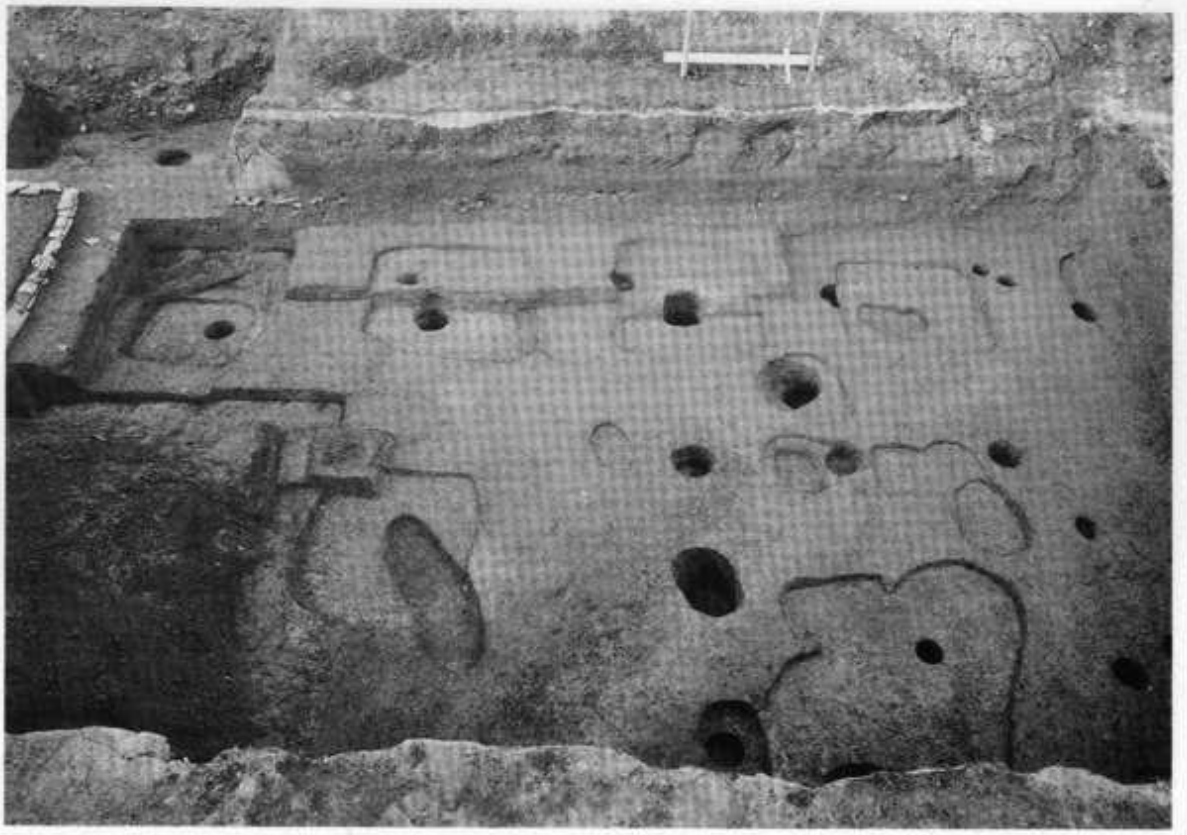
第 4 次調査　ＳＢ001基壇北辺部中央付近の瓦積みの状態（北から）



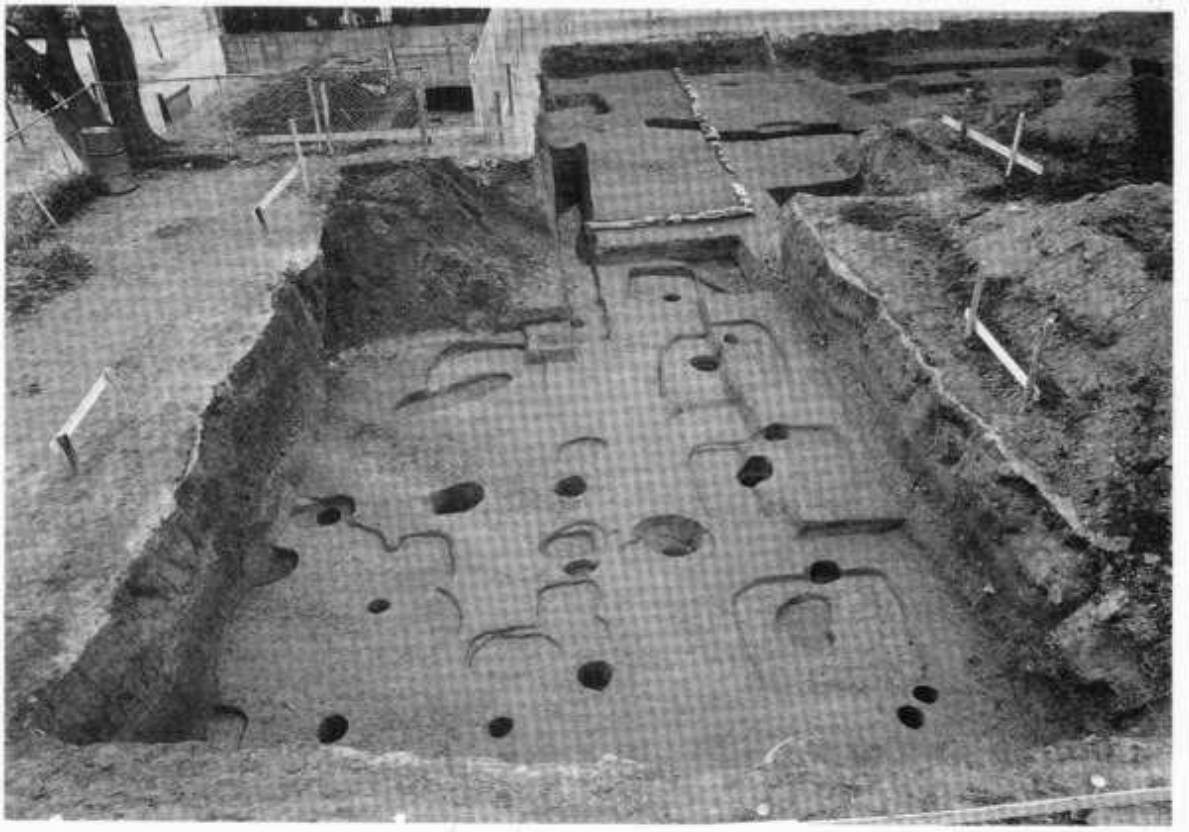
第 4 次調査　ＳＢ001基壇北東隅の瓦積みの状態

第 4 次調査　SB001基壇の版築と旧土壇の状態（北東から）

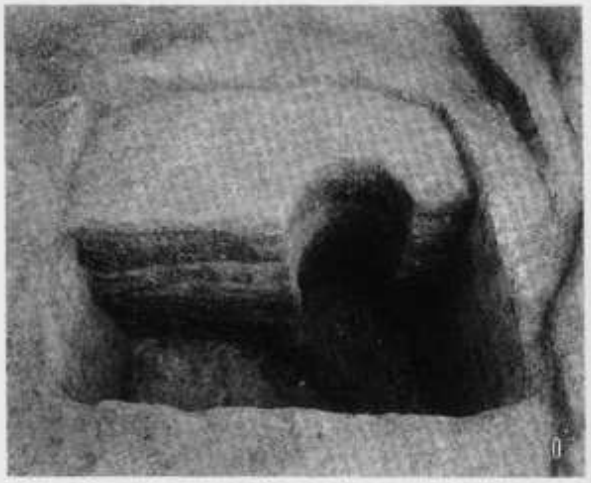
塔基壇（土壇）の旧景観　　昭和33年小田富士雄氏撮影

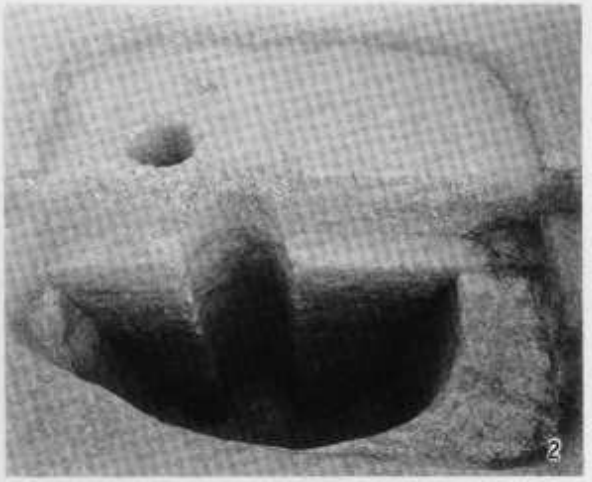


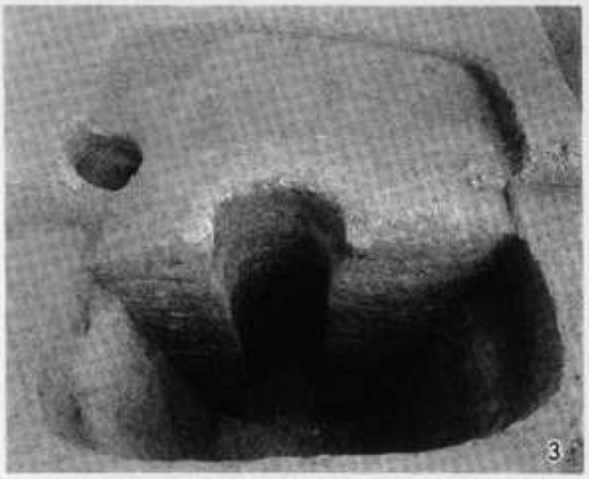
第４次調査　柱立柱建物ＳＢ010（南から）

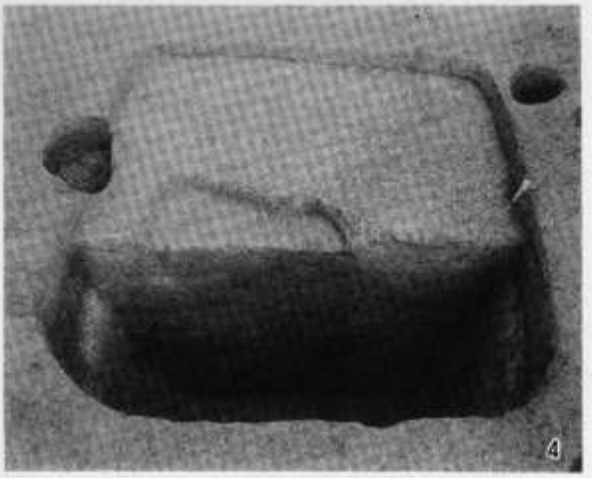


同上（東から）

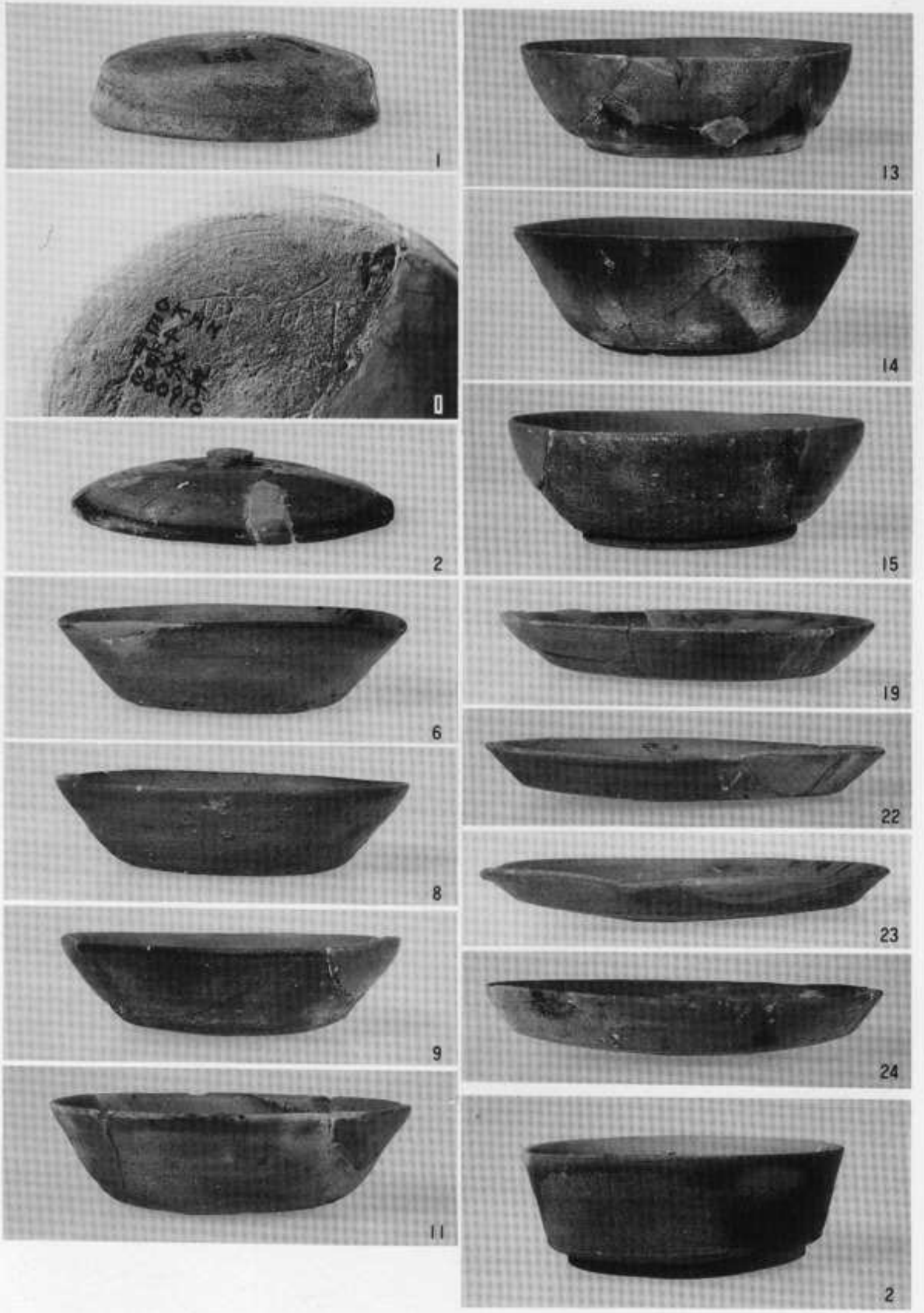




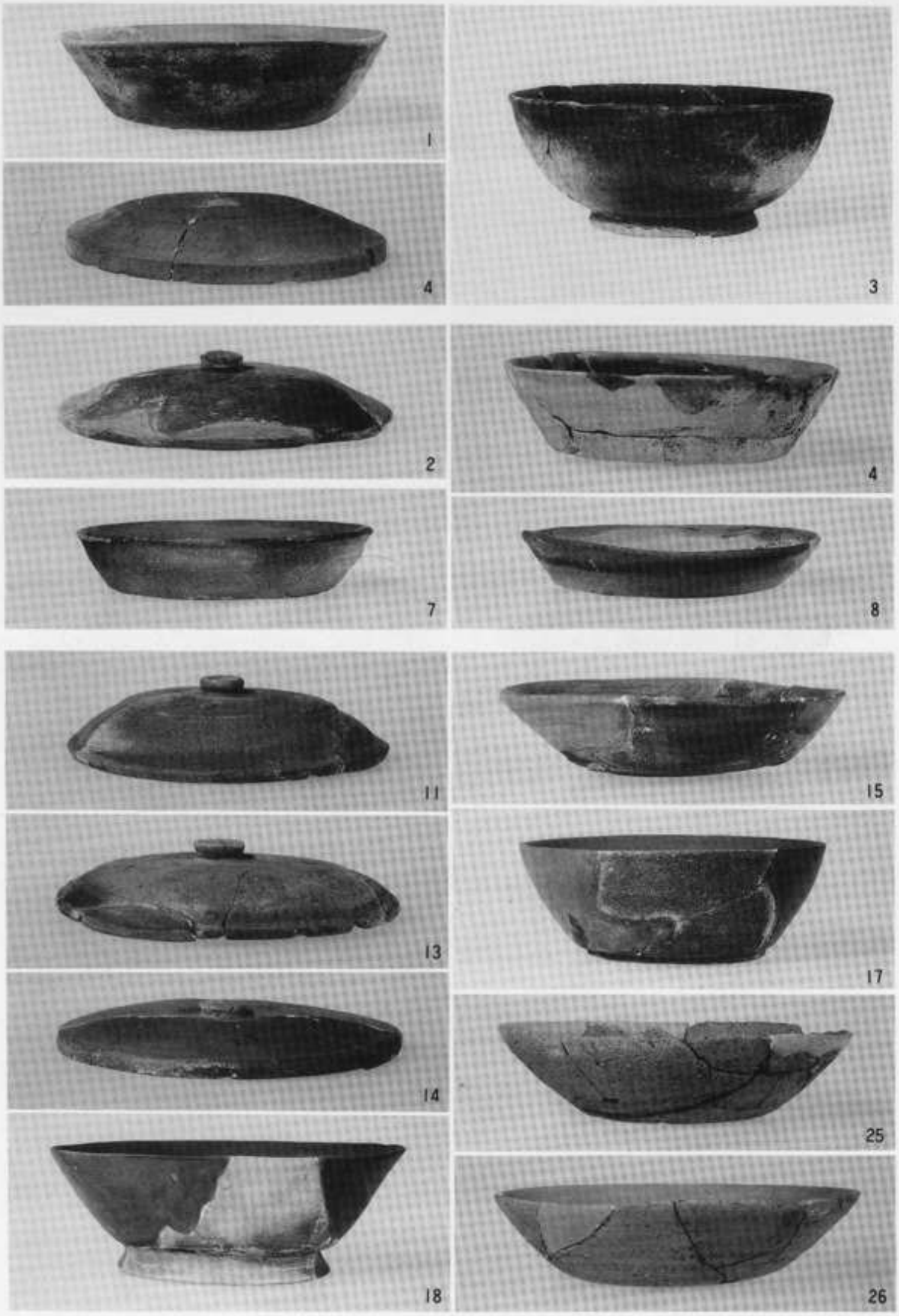




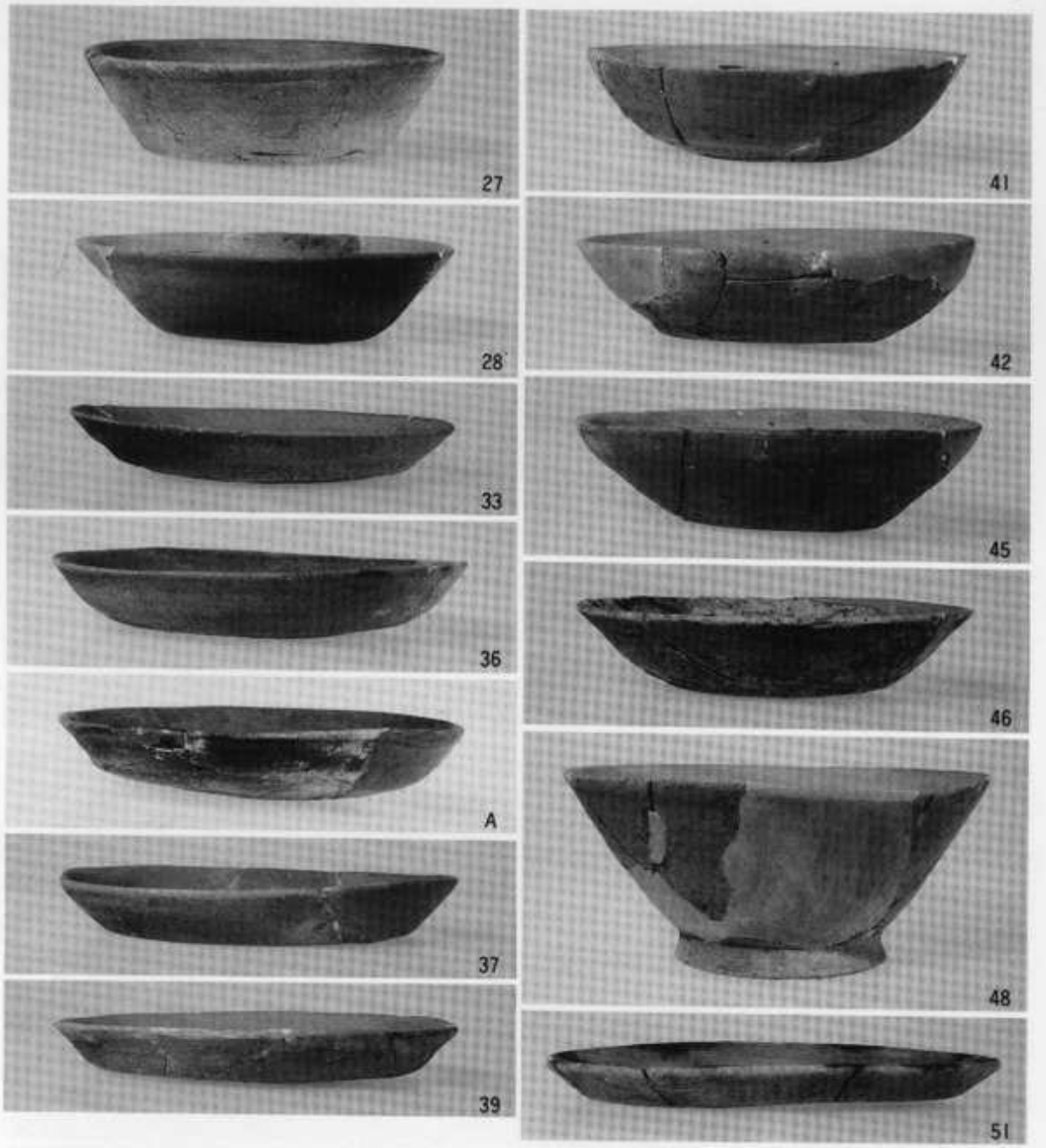
SB010柱掘形
1～4　北第1列（西から東へ）
5　　北第2列



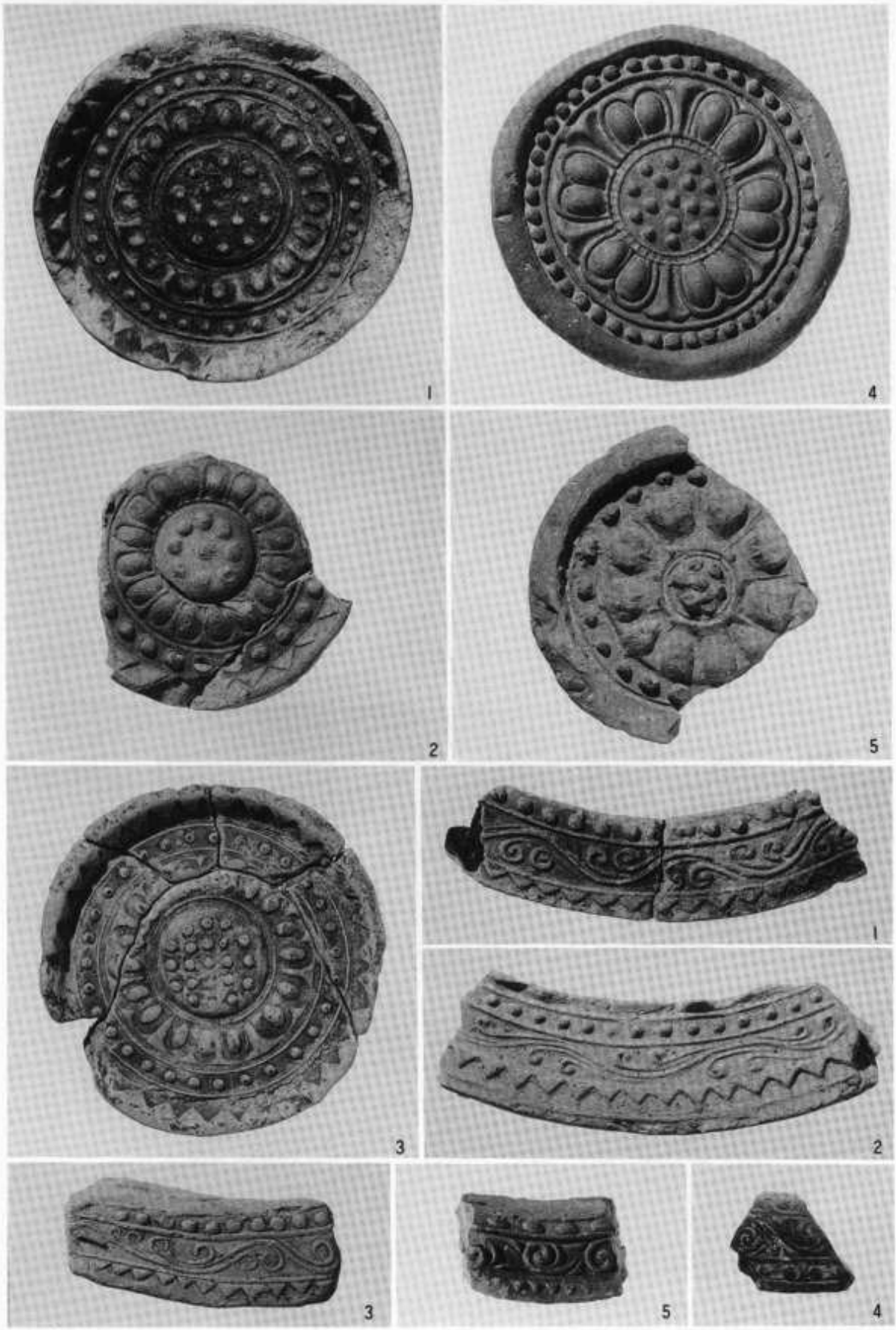
第３次調査　暗茶色土層・ＳＫ014出土土器



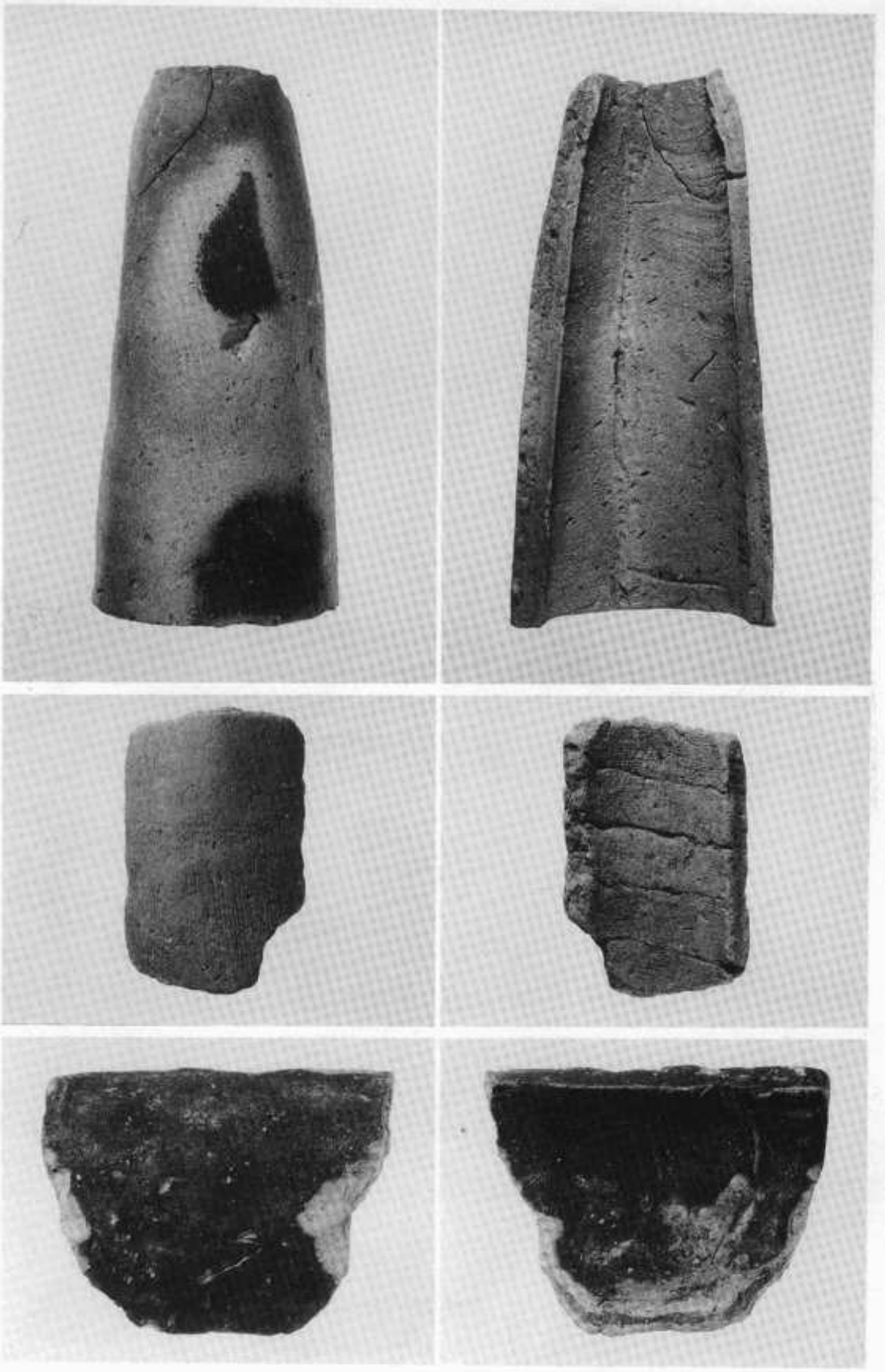
第４次調査　ＳＢ010柱穴・ＳＫ016・ＳＸ017、暗褐色土層・暗茶色土層出土土器



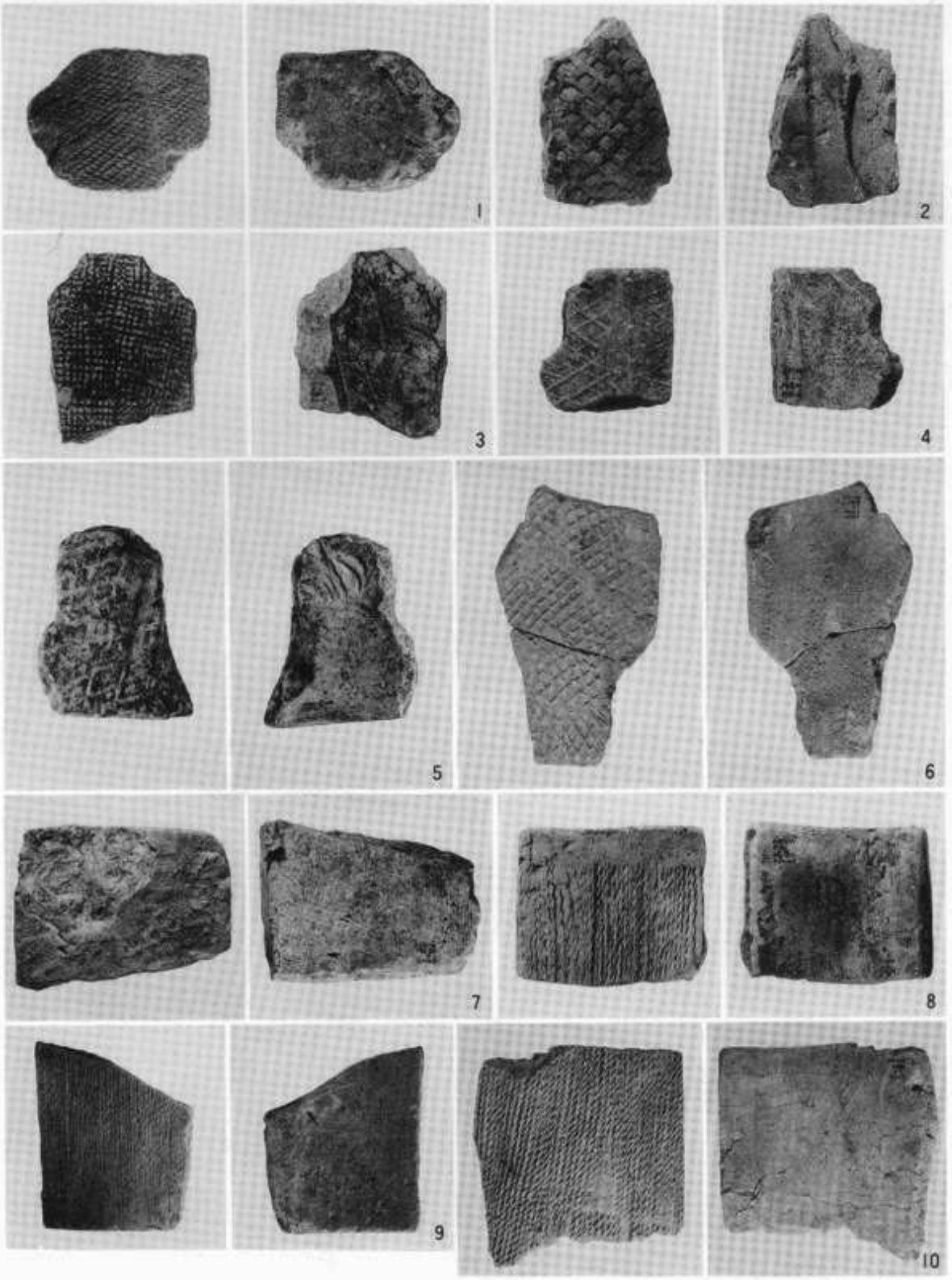
第4次調査　暗茶褐色土層出土土器



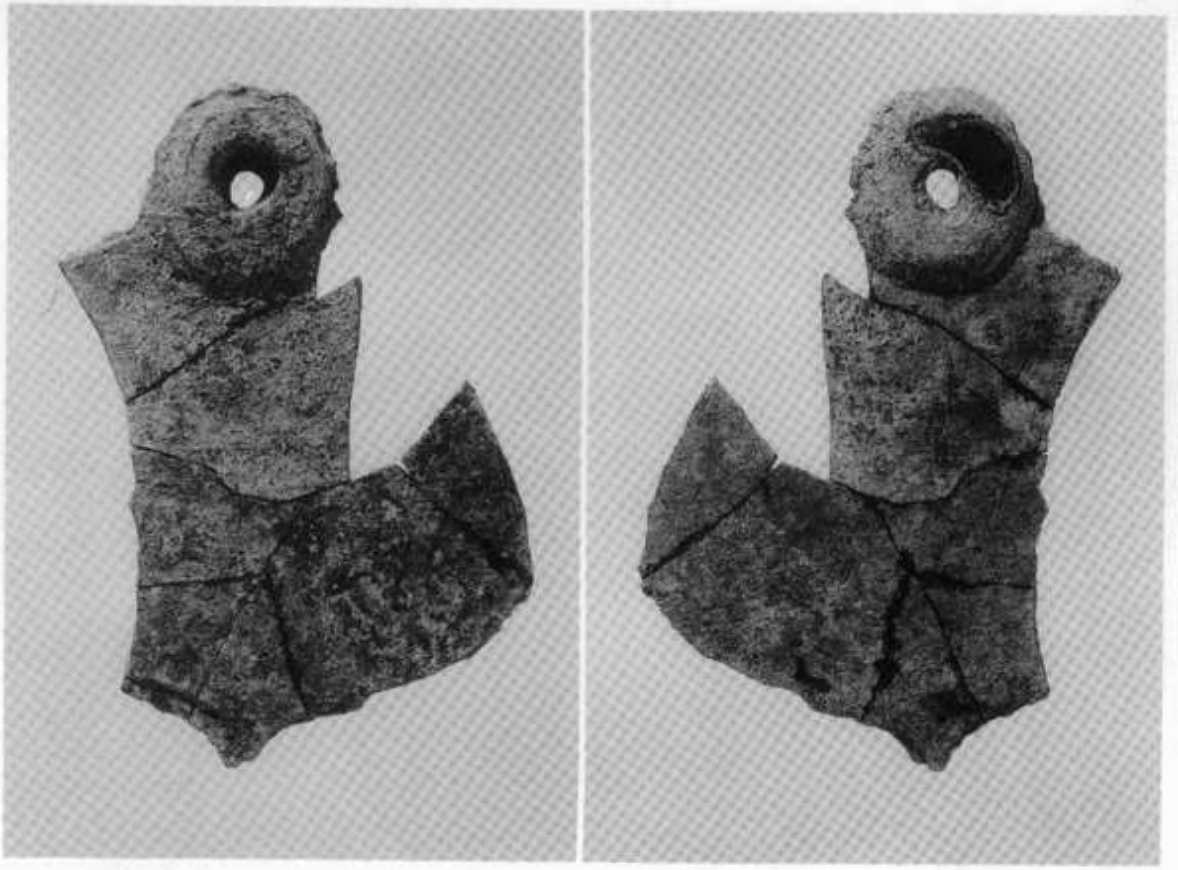
出土軒丸・軒平瓦



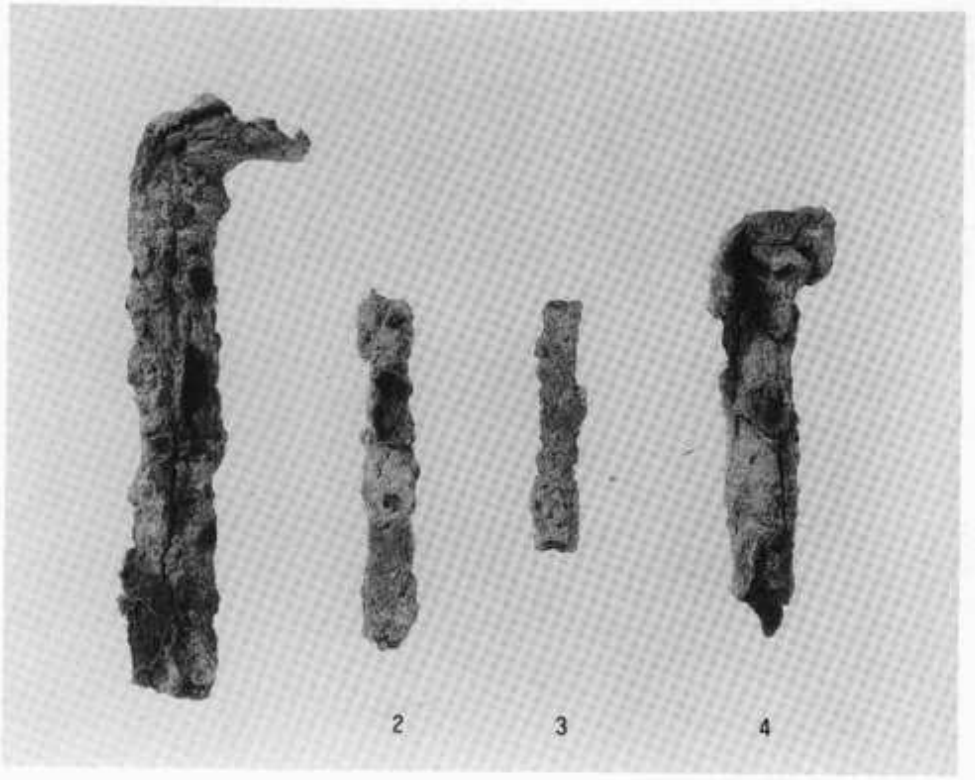
出土丸瓦・丸瓦粘土紐痕跡・道具瓦



出土平瓦



第４次調査　青銅製風招



第４次調査　鉄釘

般　若　寺　跡　II
大宰府史跡昭和62年度発掘調査概報別冊
昭和63年3月
発行　九州歴史資料館資料普及会
太宰府市石坂4丁目7番1号
印刷　赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8－34